特61
697

ナポレオン

44.10.11

題言

『佛郎王(フランス)。王起二何處一。大西洋。太白鐘レ精眼碧光。天付二韜略一鑄二其腸一。鰲二食歐羅一東拓レ疆。誓以二崑崙一爲二中央一』とは頼山陽がナポレオンを詠せる長詩の起首にあらずや。嗚呼、其身コルシカの一孤島に生れ、眇々たる一士官より起りて、一躍佛國皇帝の位に陞る。何ぞ其れ偉なる哉。

其一生の間、大小幾十戰、早くツーロンの攻撃に偉功を奏し、尋ぎて伊太利を討ち、埃及を征し、墺國を敗り、戰へば則ち勝ち、攻

むれば則ち取り、宛かも秋風の枯葉を拂ふが如し。

山陽の所謂『天付二韜略一鑄二其腸一』もの信なり。而かも啻に武略を以て世に絶れたるのみならず。法典を編成して、自由民權の思想を鼓吹して、以て封建的貴族主義を打破し、佛國を改造して、以て人權平等の大主義を確立し、其他、教育に美術に、農工業に改善發達せしめしもの一々縷指するに遑あらず。宜なり政治家として、外交家として、將た立法者として、世界第一流に位すとすること。

其全世界の天地を蹂躙し『誓以二崑崙一爲二中央一』干戈を露國と交へ、ワーテルローに一敗して、遂にセントヘレナ島に貶謫せられ、

鑾煙瘴霧の中、病を獲て斃れ、末路の悽慘、言ふに忍びざるものあり。而かれども成敗は武人の常事のみ。何ぞ英雄たるを傷はん哉。

顧ふにナポレオン世に卽きてより。星霜既に百餘年、佛國の政体は、數次變遷して、共和政体の基礎鞏固となりたるに拘はらず。佛人皆之を追慕して措かず。其性行事蹟に關する書、五車を以てするも尙ほ足らずといへども、新著の一たび世に出づるあれば、輙ち必ず爭うて之を讀むといふ。盛名赫奕猶ほ昨日の如き想ふべし。

今や我國は隆々として世界一等國の伍伴に列し、國民の思想も亦大に發展し、世界歷史を愛讀し、世界的偉人の性行事蹟を研究せん

とする風潮漸く勃興す。洵に喜ぶべし。

少年子弟此編に依りて、多少偉人の研究に資するあらば、余の幸何物か之に如かん。

ナポレオン年譜

一七六九年　八月十五日コルシカに生る。

一七七九年　五月ブリエンヌ兵學校に入る。

一七八四年　巴里の陸軍學校に入る。

一七八五年　九月少尉となり、ラフェール砲兵聯隊附を命せらる。

一七八六年　九月故郷に歸る。二十一ヶ月を經てオーゾンヌの聯隊に入る。

一七八九年　九月故郷に歸る。

一七九一年　二月オーゾンヌの聯隊に入る。
夏第一中尉として、ウアランヌ駐在の聯隊にうつる。
秋故郷に歸る。

一七九二年　六月巴里に至る。
此月巴里人民王宮に闖入す。

一七九三年　十二月ツーロン攻撃に偉功を奏す。

一七九五年　十月巴里の暴徒を擊退す。

一七九六年　二月伊太利征討司令官に任ぜらる。
三月九日ヨセフエーヌと婚す。
同月伊太利に發す。

一七九七年　二月マンチユーアを降す。
十月カムポフオルミオ和約成る。
十二月巴里に歸る。

一七九八年　五月埃及遠征の途に上る。
七月都城カイロに向ふ。
十月佛國に歸る。

一七九九年　十二月第一執政官となる。

一八〇〇年　オーストリアを征せんとし軍を發す。

六月マレンゴの戰に敵に勝つ。

十一月ホーヘンリンデンに大に敵を破る。

一八〇一年　二月リウネビールに媾和條約を締結す。

五月文武官吏二千餘人に貴族の榮號を授、

一八〇二年　三月アミアン條約を締結す。

終身執政官と爲る。

五月地方行政を改革す。

一八〇三年　法典を編成す。

一八〇四年　三月新法令實施。

五月皇帝の位に卽く。

十二月皇帝戴冠式を擧ぐ。

一八〇六年　十月プロシア及びサクソニアの聯合軍をイエナに破る、尋ぎてポツダムの王宮及びベルリンに入る。

十一月ベルリン條約を締結し、大陸封港令を發す。

一八〇七年　六月大にロシア軍を破り、休戰條約を結ぶ。
七月巴里に凱旋す。

一八〇八年　ポルトガルの首都リスボンを占領す。

一八〇九年　イスパニア國土を奪ふ。
四月より七月までオーストリア軍と戰ひ大に勝つ。

一八一二年　十二月墺皇女マリアルイズと婚す。
五月ロシア征討軍を發す、長驅モスクバ市に入る。

一八一三年　十月雪中に退軍す。
十月ライプチヒの戰に大敗す。

一八一四年　三月同盟軍の爲めに巴里を陷らる。
四月帝位を去る。

一八一五年　五月エルバ島に謫せらる。
エルバ島を脱し、三月巴里に入り、ルイ王を追ひ再び即く。
六月ワーテルローの戰に大敗す。
十月セントヘレナ島に貶謫せらる

一八二一年　五月五五日逝去。

ナポレオン年譜終

偉人言行錄

ナポレオン

杉原夷山著

一　家系

ナポレオンは其の先を探究すれば、一二六二年に、異名をボナパルト又はブオナパルトと稱したる一フイレンツエ人、ウイリアムに出づ。當時フイレンツエは、ゲルフ黨と、ギベリン黨との間に、爭鬪絕えざりしが、ウイリアムの黨派たるギベリン黨、一時勢ひを得たるが、忽ち敗北し、ウイリアムは、ゲルフ黨の追擊を逃がれて、サルザナなる、トスカ

ナの僻村に潜むに至る。日居月諸茲に三世紀を經て、一五二九年に至りフランシム、ボナパルトといへるもの、故ありて、住み馴れし伊太利の故郷を去りて、コルシカ島に移住せり。

二　ナポレオンの父母

ボナパルトの一族、既にコルシカ島に來りてより、十七、十八世紀の間、代辯人又は法律家を以て、漸次名を顯はし、終に豪族となる。十八世紀の中葉、一族の首長、カロロ、マリア、ボナパルトといふもの、同島の大學に法律を學ぶ。此學校の敎育の目的は、パオリーといへるものジエノバ、佛國に抗せんが爲めに、敎育に依りて民心を結ばんと欲し、

カロロは遂にパオリーに從つて、軍を起し、ジエノバ人を島外に驅逐するを得たり。一七六四年カロロは、フイレンツエ家一族のレチチア、ラモリノを娶りて妻とす。ナポレオンは實に其の第四子なり。

三　父節を變じて敵に降る

コルシカ島民は、ゼノア政府の羈絆を受くるに堪へず、常に之を脱せんとして、反旗を飜へし、戰ふこと四十餘年に及び終に獨立國となるを得たり。然れども一七六八年、ゼノア政府が負債の爲めに、コルシカを佛國政府に讓與するに及びて、佛の大兵來り襲ふや、愛國家パオリーの徒、痛く憤慨して之に抗したりしかど、衆寡敵せず。翌年五月大敗して

同志三百四十名と共に、英國に逃がる。

カロロ、ボナパルトは、パオリー等と共に、戰ひに從事し、妻も婦女纖弱の軀を以て進んで大敵に當り、砲煙憚雨の中を馳驅せしが、カロロは、力竭きて終に節を變じ、敵に降りて佛國に臣服の禮を取りて其の保護を受くる事を約し、アヂャシオに歸れり。居ること幾ばくならずしてナポレオン生る。時に一七六九年也。史家ジャコビ曰く、コルシカには自由の爲めに殉すべきもの竭きて、則ち英雄ナポレオンを出せりと。

四　ブリエンヌの兵學校

ナポレオン年甫めて十歳、官の許しを得て、ブリエンヌの兵學校に入る。此の兵學校は貴族の子弟を敎育せんが爲めに、特に王室より一切の費用を供して、設立せられたるものなり。ナポレオンは既に此の學校に入るや、父は家財を蕩盡して、十分の學資を支給する能はず。且つ從來干戈を擧げて、佛國に抵抗し、頃日漸やく歸服せる新領土の出なるを以て、他の子弟等の輕蔑する所となりぬ。

されば幼き心にも常に、父のパオリーの徒と。志しを同じうせず。節を變じて佛國に臣服の禮を取りたるを慨し、佛人の暴慢を痛憤して自ら禁ずる能はざりき。其の十一歳の時、コルシカ征討の主唱者たりし、陸軍大臣の肖像を取りて、悲憤慷慨の餘、寸裂して以つて棄てたることあ

りき。

五　プルタークの英雄傳

ナポレオンは、深く憂憤する所、既に此くの如かりければ、他の子弟と嬉戯するを好まず、沈靜寡默、幽獨を愛し、常に書齋に籠りて、一意學を勵み、諸學科中、殊に數學に長じ、又地理歷史を好みて、最もプルタークの英雄の佛譯を愛讀せりといふ。想ふに秋風孤燈の下、細雨老蛩の夕べ、遠く希臘羅馬の英雄が、祖國の獨立の爲めに戰ひたる、偉蹟を追想しては、誓うて自國の獨立を謀らんと欲し、血湧き肉躍りしこと知らず幾何ぞ哉。

六　兵學校を卒業す

ナポレオンは、螢窓雪案、孜々として業を修め、遂にブリエンヌの兵學校に於て、正規の業を卒へ、一七八四年、巴里の陸軍士官學校に入れり。不幸は身に纏へて、翌年父は七人の弟妹を殘して此の世を去りぬ。ナポレオンは從來王室の經費にて敎育を受けつゝある身に、俄に其の家族を養育せざるべからざるに至り、殆んど策竭きて、つぶさに困苦辛艱を極めたり。

七　死して複蘇す

ナポレオンの晩年貶謫せられて、セント、ヘレナにあるや。能く其の

近侍に向つて、自己の冒險譚を物語れり。其の一に曰く、余幼時に於て溺死の禍を免れたることあり。年十七ばかりの時、一日學友と共に、サオヌ河に泳ぎて、俄に痙攣にかゝり、終に水中に沈沒しければ、學友は余を以て、既に亡きものと思ひつゝありしが、暫らくにして余が全く氣絶して、遙なる砂岸の上に打ち上げられあるを發見せしかば、皆相集まりて余を蘇生せしめたりと。

八　士官學校を卒業す

一八八五年、ナポレオンは、好成績を以て、巴里の士官學校を卒業しラフエール聯隊の少尉となりぬ。其の熱心なる勉強と、從順なる服務と

は、早く上官の認むる所となり、屢々嘆稱せられしといふ。翌年九月故郷に歸り、再びオーゾンヌなる聯隊に入れり。

九　ルーソーの民約論

ルーソーの民約論を讀みて、コルシカ島民の反亂の當然なるを知り、大いに憤興する所あり。曾て其の事業の困難なるを感じて、失望の餘り自殺せんと企てたることありき。然れども飜へつて其の事の回天の偉業なるを思ひ、鋭意之を成就せんと欲せり。

ルーソーが、ジウネーブに生れ、スウイス人の心を以て、自由の爲めに戰ひたる、コルシカ島民の勇氣に感じ『異日歐洲の天地を震動せしむ

るものは、必ずコルシカ島民ならん』と豫言せるは、他日ナポレオンの世に出づるを知れるもの、如く、果して的中して過またず。何ぞ其れ奇なる哉。

一〇　ナポレオンこパオリー

コルシカの獨立は、ナポレオンの夢寐にも忘るゝ能はざる所、一七八九年九月、賜暇を得るや、直ちに鄕里に歸りて、一方の首領となり、國民軍を組織して、コルシカの獨立を計らんとす。時に多年景慕せるパオリーの一派は、許されて、市民たるの權利を得ると共に、政權を掌握せり。是に於て幼年より佛國に在りて、自由民權を皷吹せられたるナポレ

オンと、英國の庇護によりて生活したる、パオリーとの思想は、固より相容れず。ナポレオンは、パオリーに會して、島事を談ぜる後、共に謀るべきの人ならざるを察し、自ら企圖する所あり。一方の首領として、終にパオリーの英國黨と戰はざるを得ざるに至れり。而かれども、賜暇の期は盡くるを以て、一八九一年二月オーゾンヌの聯隊に歸りぬ。

一一　窮困

ナポンオンの困苦窮艱せしは、此の際にして、幼弟ルシアンと共に住し、屢々空乏せる囊中より、弟の敎育の資を給したり。其が室に備ふる所のものは、只疎雜なる寢床と、雜書の推積せられたる机と、二個の

椅子とのみ、終日兄弟パンを食ひて、辛くも生活せしが、而も尚ほ費用足らざりしかば、之を補なはんが爲めに、懸賞論文に應せしが、落選したりしといふ。

二二　巴里に向ふ

ナポンオンは斯かる窮困の中に、日を送りつゝありしが、幸ひにして第一中尉として、ウアランヌ駐在の聯隊に遷されたり。時に革命は次第に歩武を進めたれば、秋季賜暇中には、コルシカに歸り、翌年五月迄滯在し、大いに爲すあらんとせしが、其の率ゐたる國民軍と、民衆との間に爭鬪起り、爾後益々窮境に陷ゐれり。是れ一は島人の同情を失ひ、一

は賜暇を延期して、佛國の國禁を犯したれば也。然れども將に大陸との戰爭始まらんとせし時なるを以て、意を決して巴里に向ひぬ。

二三　革命

ナポレオンの巴里に入るや。佛蘭西革命の慘劇、漸やく熟し來らんとし、ルイ十六世の末路正に近づきぬ。六月廿日、數千の亂民國民萬歳の聲を放ちて、チウーレリーの王宮に進まんとす。二人之に追從して進めば、王宮の窓開けて、國王ルイ十六世は、亂民の贈れる赤帽を戴きて立てり。ナポレオンは國王皇后の凌辱せらるゝを見、憤激の情に堪へず。覺えず叫びて曰く『愚なる哉。砲火を以て、此の愚民を掃蕩せざること

砲火一發、殘餘は正は消滅せんのみ』と。

一四　革命の由來

佛蘭西革命の其の由つて來れること久し。往古ルイ十四世、遊逸、放縱、士民の產を奪ひて、酒色に耽り、嗣王ルイ十五世に至りては、驕奢益々甚だしく、有司私を營み、財の用法を士民に知らしめず。されば士民は、益々苛酷なる法度の下に呻吟し、重稅を負擔して、困窮底止する所を知らず。飢餓に逼りて、終に稅吏に抵抗し、紛爭を生ずること頻々たり。人民自主の跡、既に全く滅びて、各州皆知事の橫暴を這しうするのみ。弊風益々長じ、政綱愈々衰ろひて、殆んど收拾すべからざるに

至りぬ。是に加ふるにラルティル、ルーソー等の如き、民主を唱へて、王權の非理を鳴らすもの、所在に起り、人心恰も醉えるが如し。一七七四年ルイ十五世は、洪水余が後に來らんと呼びて死し、ルイ十六世王位に昇るに及びては、禍機殆んど一髮を容れず。是に於て、一七八九年國民議會を開き、法度の改正、施政の良法を求めしが、平民の勢力次第に增加し、同時に政黨の倶樂部盛んに起りて、各々激烈の論議を唱ひ、民心益々激昂して、バスチール城の闖入となり、ワルサイユ王宮の亂入となり。一七九一年ミラボーの死後、官民の疾視益々甚だしく、王は微服して、宮中を脫し去るに及びしことあり。翌年歐洲の諸王、佛民の亡狀

大いに自己の利害に關するを恐れ、各國相聯合して、兵を起して佛國を攻め、王を助けて人民を鎮壓せんとせしも、却つて佛王を危うからしめたるに過ぎざりき。チユレリー王宮第一の侵入は、六月二十日の事にしてナポレオンの目擊せるもの則ち是れ也。

國會遂に王を廢して、共和政府を立て、翌年王を死刑に處し、此の流血革命に依りて、積年の弊習一掃せられ、自由、平等、友愛の三大主義は、廣く天下に宣揚せられしも、同時に共和の弊は、其の極に達して、諸政黨互ひに相濟陷し、刑死慘戮、日として之れなきは無く、人心終に共和に倦みて、強力の君主を戴かんことを思ふに至りぬ。ナポレオンの

出でしは、實に此の時にあり。蓋世の英雄、知らず風雲に際會して、如何なる偉勳を建てん。

一五　コルシカ島を去る

ナポレオンは、巴里の擾亂を後にし、暫時の賜暇を以て、コルシカ島に歸りぬ。時にパオリー一派は益々勢力を振ひ、佛國政府の革命黨の手に歸するや、佛國と分離せんとし、佛國黨の氣勢揚がらず。目するに簒奪者を以てせられ、二派の間に軋轢絶えず。佛國黨は、佛國政府の援助を籍りて、反對黨を壓せんとせしも、事破れて回復する能はず。ナポレオンの一家は、反對黨の爲めに、破壞せられたるを以て、僅かに家族を

纏めて、コルシカを去りぬ。

一六　ツーロン攻撃

ナポレオンが、初めて兵略戰陣に於て、其の天才を發揮せるものは、一七九三年ツーロン攻撃の時にあり。ツーロンは、地中海に於ける佛國の軍港にして、市街は灣の北岸にあり。

繞らすに堅固の城壁を以てす。政府に反抗せる軍兵は、根據を此處に置き、英西聯合艦隊が、海上より援兵を送り、頑强に抵抗せしが、ナポレオンは、先づ敵の堡壘の偵察を行ひ、諸般の準備を終へ、翌朝より港口の兩堡壘に向ひ、砲撃を始めしが、艦隊よりは、援兵と大砲とを上陸せ

しめて、反抗軍を助けたり。ナポレオンは苦戰數刻の後、部下を激勵して、之を攻め、其の砲戰に勝利を得。次ぎて突撃遊隊を放ちて、兩堡壘を略取せり。

是を以て聯合艦隊は、反抗軍に貸與せる軍隊と、大砲とを取り戻し、遂に倉皇として外洋に去れり。府民大いに失望して、復た反抗の勇氣なきに至り、ツーロン要塞は、遂に全く陷落す。ナポレオンは、此の偉大の功勳に由り、一躍して少將となり、二十七歳にして中將に陞進し、一七九五年二月を以て、イタリア軍の總司令官に任ぜらる。

一七　未だ志を得ず

ナポレオン既に、ツーロンの攻撃に偉功を建て、少將に任ぜらる。然れども一些事より、反對者の陷いる所となりて、其の職を廢められ、快々として巴里に歸り、一時は赤貧殆んど洗ふが如く、馬車を賣りて、僅かに衣食を支ふるに到りしことあり。

後ち三年間駐在せるワラレスに赴き、兄ヂョセフに遇ひ、又行きてモンテリマール村に留り、其の氣候風土の意に適せるを喜び、村中に邸宅の賣却せんとするものあるを見て、之を購はんとせしに、價ひ極めて廉なり。訝りて其の情狀を探ぐり、其の邸宅に曾て親殺しありしを知り、顏色を變じて、直ちに購求を斷念し、早々として巴里に歸る。

一八　機會到來

時に巴里は革命の亂、已に極度を超え、所謂戰慄時代は去れり。一八九五年、又憲法を新たにして、ヂレクトリー政府を作り、全國士民の稱賛を受け、第十日を以て、施行の初めとなさんとす。然るに巴里の府民中、是に慊たらざるものあり。極端の共和黨、王政黨の殘類相合し、愚民を煽動して、國會を襲はんとす、國會之れを聞き、議員、バラーをして、兵を督して亂民を鎮定せしむ。バラーは、ナポレオンの才の用ふべきを知り、麾下に招ぎて、托するに重任を以てせり。

一九　暴徒鎭壓

ナポレオン暴徒鎮壓の命を受けて、直ちに部署を定め、晝夜、拮据經營、大砲を各要所に配置し、以て襲撃に備ふ。號令嚴明、士卒皆服す。

王政黨は、橋を超えてチウーンリーを襲はんとせしが、ナポレオン士卒に指揮して、大砲を放つ。彈丸雨下、王政黨忽ち周章狼狽して退ぞく。

次ぎて騎兵等進撃せしも、夜に入りて降服し、暴徒一擧にして平らぎ、新政府初めて心を安んずるを得たり。

二〇　『ヨセフイーヌ女』を娶る

ナポレオン既に、青雲の階梯を穫たり、昔日の窮困、今や一夢と化して、名聲次第に揚がり、初めて交際社會に出入するに及び、偶々『ヨセ

フイーヌ』といへる女子を見、戀々の情に堪へず。之と婚して妻となさんとす。ヨセフイーヌは、前に恐怖時代に於て、斷頭臺の犧牲となれるボーアルチー將軍の寡婦にして、兒二人あり。年齢はナポレオンより、長ずること五歳なりしかど、容姿艶麗、梨花一枝、春雨を帶ぶにも似たれば、痛く英雄の心を惱ましめたるなり。ヨセフイーヌ終にナポレオンの熱情に絆されて、相許すに至りぬ。結婚の式は。一七九六年三月九日を以て擧げぬ。而して其の日ナポレオンは、伊太利征討の命を受け、二日の後、新婦と手を分つて遠征の途に上れり。ナポレオン曾て其の結婚の由來に付きて語りて曰く。

余が初めて彼女を知りしは、一七九五年ワンヅミエール十三日の事なりき。年の頃十二三歳許りとも見ゆる小兒、余が許に訪ひ來りて、彼の父たる故將軍の遺劍を返濟せんことを請へぬ。是れ實にユージエーヌ、ボーハルネーなりき。余其の心の殊勝なるに感じ、直ちに其の請に應じたりしが、彼は父の帶劍を手にして、悲哀の情に堪へずやありけん。涕淚潸々として衣襟を濕ほせり。余其の至孝の致す所たるを思ひ、痛く心を動かして、亦之が爲めに泣きぬ。後兩三日、彼の母來りて余の好意を謝せり。其の風貌と其の精神の美とは、端なく予をして戀々の情を起さしめ、遂に之と結婚せんことを決意せし也。

其の事、頗る小説的にあらずや。ナポレオン之を愛して惜かざりしも、契緣幾年の後、政略上の必要より、離婚の已むべからざるに至り、佳人をして破鏡の涙に姻ばしめぬ。

二　伊太利征服軍總督

佛國の内亂未だ全く平定せずして、人心危懼す。然れども佛國の民政を亡ぼさんとして、起これる聯合軍は、概むね勝ち得て、和するもの相繼ぎ、一七九五年に到りては、佛國に敵する者、英、魯、墺の三國に過ぎず。

佛政府は遂に大軍を募り、之れを三隊に分ち、一は東北日耳曼に向はし

め、二はアインを渡りて墺都に向はしめ、三は伊太利に赴きて、墺兵及びサルヂニアの兵を擊たしめんとす。而して伊太利軍の總督はナポレオンなり、ナポレオン時に年二十七。

二二　士卒の心を攬る

一七九六年三月二十一日、巴里を發して伊太利に向ふ。其の發するに臨みて、諸兵に告げて曰く、汝等諸兵よ。汝等は平日數々餓え且つ凍えんとせり。而かも能く國家の爲めに精忠を竭くす、洵に嘉すべし。今また政府は汝等に負はしむるに重任を以てす。其の報ゆるところ、多かるべくして實は尠し。これ何等の恨事ぞや。予は之れより汝等を率ゐて、

世界屈指の土地豐沃、民衆殷富の國に導きて、金衣玉食に飽かしめんとす。前途の好樂此くの如しと、諸兵感激して、將軍の爲めに、死せんことを期し、相共に勇躍して敵地に向ふ。

二三　征討軍の大捷

ナポレオンの伊太利征討軍は、二年前よりゼノアの近傍に防禦の謀計を講ぜる衰殘の兵なり。敵軍は墺國及びピイドモンドの聯合精兵二十萬に達す。尋常の戰略を以てせば、勝敗の數固より明らかなり。茲に於てナポレオンは、小軍隊の全力を一點に集注して、敵の未だ備へざるに乘じ、其の中心を擣ちて、首尾相救ふ暇なからしめ、中心を破り了らば、

轉じて、順次左右に移り、此の如くして、一々敵陣を粉碎し去らんと欲し、固く必勝を期して、四萬の弱兵を以て、二十萬の大軍に當り、モンテノット、ミレシモ、デーゴー、キコム、及びモンドビユに於て、十一日間五回、疾風迅雷の勢ひを以て突進し、大いに之を敗り、サルヂニア王をして、地を割き城を開きて、和を乞はしめ、直ちに墺兵を追うて南進し、監督廳に書を致して曰く、我兵は明日墺將ボーリユーを襲はん。又彼を追うて、ポー河を渡り、悉くロンバーデーを略取して、一ケ月にして、チロルの山上に立ち、ライン軍に合して、バワリアに向はんと既にして兵を進む。墺兵大いに敗れ、奔りてマンチユアを守り、伊太利

の諸侯國、皆和を軍門に請ふ。マンチユアは、墺兵の根據なり。ナポレオンはミランより進みて、之を攻むれども、堅くして拔けず。而して墺政府頻りに援兵を遣はし、前後挾んで、ナポレオンを窘しめんとす。然れども佛兵の英氣益々鋭く、アルコラ、リボリ等の諸戰、大いに墺の精兵を破りて、翌一七九七年二月、遂にマンチユアを降し、其の勢威、以太利全土を震慴せしむ。ナポレオン以太利軍總督の命を受けてより、茲に至りて一年、マツセナ、オーゼロー、ヂユーバル、マルモン、ベルチーエの諸將、皆其の幕下に集まり、墺國和を乞ひて、カムポフオルシオの條約成り、一七九七年十二月、ナポレオン巴里に歸る。

二四　萬死に一生

ナポレオンのセントヘレナ島に在りて、曾て自ら語る所によれば、其の最大の危險に遭遇せしは、彼が戰陣の初期、殊にツーロン及び、アルコラの役にありしと言へり。アルコラの役にありては、彼の馬は射られて重傷を負ひ、苦惱して敵の方に驅け行き、沼地に入りて死せり。彼の、體軀も亦頸まで泥土の中に埋沒して出づること能はず。若し墺太利兵士の之を發見するありしならば、彼は忽ちにして、其の刎ぬる所となりしならんも、幸ひにして部下の兵士來りて、彼を救ひ出し、以て事なきを得たりき。彼が又リミニにありし時には、マンチエアの降將キエルムセルが、使を遣はして彼を毒殺せんとするの計畫ある旨を告げて、危きを拯ひたりし事あり。

二五　世界何物か佛兵より美なる

ナポレオン、ミランに陣する時、一日早朝、騎して將に出でんとす。一卒あり馳至り、其の齎らす所の戰報を呈す。事頗る急なり。帝之を馬上に取りて讀み終り、返答を與へ、且つ曰く、速に歸り之れを傳へよと。卒對へて曰て、僕今馬なし。嚮に騎する所のものは、馳驅其の度に過ぎしため、軍門に達する頃、斃れたりと。帝之を聞くや直ちに馬を下り、曰く之を取れと。卒其の主將の乘馬たるを以て躊躇す。ナポレオン

之を見て曰く、此の馬稱々美なるを以て、汝は身分不相應と爲すや。決して然る配慮に及ぶべからず。天下何物か佛國の兵より美なるものあらんや。

二六　一兵士の睡眠を護す

マンチユア攻擊の際、一兵卒の樹根に枕して睡眠するを視、自ら其の兵卒の銃を肩にし、之を護ること凡そ半時間計り、兵卒は目を醒し、此の体を見て大いに驚き、恐懼の餘り、身を投じて、ナポレオンの足下に叩頭せり。ナポレオンは、毫も怒れる狀なく、徐むろに之に諭して曰く醒めたる乎、醒めたる乎。汝の銃は吾能く之を保有せり。實に汝は長途

を馳せ。且つ能く苦戰せり。汝の睡眠決して理なきにあらず。然れども目下瞬間の怠慢は、全軍の勝敗に關す。實に容易ならざる時なり。吾今日幸ひに代りて汝の職分を全うせり。他日再び此の轍を踏み、全軍の存亡を度外に置く勿れと。

二七　埃及遠征

ナポレオンの凱旋して巴里に入るや。市民歡呼して之を迎へ、名聲隆然、督政官を壓す。ナポレオンは監督たらんと欲せしも、奈何にせむ、年齢未だ足らざるを以て許す所とならず。懊惱日を送る。一日慨然として其の書記に謂つて曰く、ブーリアンヌよ、予は到底茲に居ること能は

ず。爲すべき事亦たこゝに在らず。衆人我言を聽かざらん。而かも尙ほ茲に居らば、終生碌々として、稠人と伍せんのみ。萬事皆志しと齟齬す。此の歐羅巴は、鼬の巢なり。人口六億の亞細亞に於ける如き、大なる帝國、大なる革命は、茲に存せざるなり。如かず東洋に行かんには。大名譽、大偉功は、必ずこゝより來ると。遂に策を政府に獻じ、一七九八年四月、乞うて東洋軍の總督となり、七月進んで埃及アレキサンドリアに上陸し、是より其の都城カイロに向ふ。當時埃及は、土耳其帝の管轄に屬せしも、其の實はマメリユークと號する、騎兵の酋長、ムーラード威を四方に振ふ。彼今佛軍の來襲を聞き、兵を備へ、金字塔の傍に待

つ。是れ古へ波斯の大王、カムビセスが、曾て埃及人を破れる處、爾來星霜こゝに二千四百有餘年、盛衰、興亡相續ぎ、人去り國替はれどもナイルの流れ、舊に依つて綠波を湛へ、懸軍萬里、今遠く異域に來りて、金字塔の高く天に聳ゆるを見る。感愴に堪へざらんと欲すとも豈得べけんや。覺えず陣頭に馬を驅け、叫びて曰く、嗚呼兵士よ。四千年來の金字塔はよく汝等の行動を看下す。汝等何ぞ其れ奮はざると。兵氣是に於て遽かに十倍し、直ちに馳せて敵陣に向ふ。

マメリユークの騎兵六千人、烟塵空を掩ひ、旌旗天に滿ち、軍容極めて壯なれども、奮戰數刻の後、佛兵の爲めに全く敗れて、ムーラードは、

三百の殘兵を率ゐて、上埃及に退ぞけり。佛兵進擊カイロを略す。然れども、此の時佛の海軍は、アブーキルの灣に於て、英將、チルソンの敗る所となりて、本國との交通殆んど遮斷す。

聯絡を絶たれて、如何とも爲すべからざる狀況に陷ゐりしかど、ナポレオンは毫も屈せず、進んでシリヤを擊ち、更に其の威に乘じて、土耳其の主都コンスタンチノープルを襲はんとし、行きてシリヤのアークル城を攻む。之を守るものは英國著名の海將シドニイ、スミッスなり。佛軍力を極めて之を攻むれども、堅くして拔けず。ナポレオン遂に大いに挫折して、五月兵を收めて埃及に歸り、更に土耳其の來兵を破りしが、

本國の形勢殆んど危ふきを聞き、志を決して潛かに船に乘じ、英人の偵察を免がれて、十月初旬佛國に歸れり。

二八　埃及今日の文明を作る

アブーキル灣海戰の結果、佛軍苦境に陷ゐり、其の本國より携へたる書籍は、船艦と共に沈沒したりしと雖も、從軍の各專門學者は、埃及の地物を利用して物產を起し、以て佛軍の糧食を供し、兵器の製造所を作り、古代文明の淵源を探知して、埃及學の起原を開きたるのみならず。埃及今日の文明の基ゐを作りたるもの、また此の遠征の賜たるを思はざるべからず。

二九　余獨り騎するに忍びず

ナポレオンは、兵卒を愛することと慈母の愛兒に於けるが如し。埃及遠征の時、炎威燒くが如く、瘴癘の氣人に逼り、衆卒の艱難尋常ならざるを見て、一令を出して曰く『騎する者皆徒歩し、患者をして代つて其の馬に乘らしめよ』と、偶々一卒あり。馳せ來りて、元帥の乘馬には、何れを擇ぶべきかと問ひけるに、ナポレオンは、之を叱して曰く、汝は未だ予の命令の意を解し得ざるか。余焉くんぞ衆苦を顧りみずして、獨り騎行するに忍びんや。各自をして、總て徒行せしめよ。先づ余より始めん』と。其れより徒歩して疲者患者の馬に傍ひ、温言を以て、且つ慰さめ、且つ行きぬ。

三〇　第一執政官

是より先きナポレオンの不在に乘じて、墺國は和約を破り、露國と同盟して、悉く伊太利を回復し、別軍は又、ラインを渡り、瑞西に臨みて、佛に攻め入らんとす。況んや國内には、反對黨再び亂を企だつるあり。財政頗る困難に、政令行なはれず。百事廢荒して、民庶怨嗟の聲益々高く、監督政府の運命、將に旦夕に迫らんとす。是を以てナポレオンの歸るや。國民喝采して之を歡迎せり。馬上の英雄今や干戈を棄てゝ、無事に懊惱するの時に非ず。乃ち當時の政權を執るものと、軍人とに結

托して、之れを賞與となし、又上院と結びて、一七九七年十一月、遂に從來の監督を廢せしむ。然れども五百員の議會は、頑として之に反し、ナポレオンを以て、自由の公敵となし、主權を簒奪せんとするの大逆者となし、法に依りて之を刑せんとせる際、ナポレオンは、將官をして、一隊の兵を率ゐて議會に闖入して、銃鎗を振うて抗拒するものを、脅制せしむ。議員恐れて逃亡し、殘餘皆ナポレオンの黨となり、會議して從來の憲法を廢し、斯たに三人の執政官を置き、任期を十年として、行政司法の權を掌握せしむ。中一人は、實權を有せるもの、他は副官にして之れを補翼するに過ぎず。又議院の制を改め、先づ一邑一郡の人民をし

て、其の中の名望者を擧げしめ、其の數邑の名望者の、十分の一を撰んで、一州の名望者とし、又各州の名望者を撰び、全國の名望者とて、此の中より國會の代議士を選ばしむ。是を以て衆人は、直接に選擧に關するを得ず。故に此の新憲法は、名は共和政治なれども、其の實は、政權全く執政官に屬したるものなれば、佛蘭西大革命は、こゝに至りて全く局を結べりと謂ふべし。此の新憲法に因りて、ナポレオンは、第一執政官となり、悉く國内の政權を掌握せり。内或ひは不滿を抱く者然きに非ざれども、ナポレオンの名聲嚇々として天下に轟き、大勢已に全く定まるを見て、敢て抗議せず。人民は參政の權を削減せられしも、從來騒

亂絶えずして、高枕平臥の日少なかりしを想ひ、甘んじてナポレオンの新政に復せり。

三一　外出を秘密にす

ナポレオンが、能く陰謀の犧牲たるを免がるゝことを得しは、主として、其の外出を秘密にせしによれり。何人もナポレオンの出づる五分前までは、其の何處に赴くやを、知ること能はざりき。故に陰謀者は、兇行を行なふべき場所を豫定するに苦しみたりしなり。ナポレオン曰く、余が第一執政官となりて幾ばくもなきに、五十人許りの人々は、余を害せんと謀れり。其多數は、曾て余に從屬せし者にて、其の中には士官あ

り。學者あり。畫人あり。彫刻家ありき。彼等はすべて熱心なる共和黨にして、自からブルタスを以て任じ、余を以て虐政家なり。ケーザルなりと見做せり。其の中余の國人にて、余に從ひたりし、アレナと云へるものあり。又今一人コルシカ人にて、セラッキーと稱する有名なる彫刻家ありき。セラッキーは、余が曾てミランにありし時、余の爲めに彫像を刻せしものなり。彼れは共和黨なるが故に余を殺さんとて、巴里に至り、兇行の機會を作らん爲め、別に余の彫像を造らんことを求め來たれり。余は當時陰謀なるを知らざりしかど、數日の間二三時間づゝ、同一の場所に同一の樣にて、座し居るを煩はしとて、之を拒絶せり。かくし

て彼は第一の計畫は、失敗に歸したるが、其の間に彼等はなほも、之に次ぐの計を旋らしつゝありき。然るに彼等の徒黨中に、余を大いに崇揚せし一大尉ありき。彼は余を除くことには贊成したれども、敎すことには不同意なかりしかば、陰謀者の人名と計畫とを、余に密告し來れり。之によれば、余が劇場に行きし最初の夜、歸路を要して之を成し遂げんとするなりき。余卽ち之を警察に告げ、おきしに果せるかな。其の夜彼等は匕首を外套の下にかくして、余の劇場に着するや否や、入り來りしかば、忽ちにして捕縛せられ、其の兇器を持せるよりして、謀殺罪に問ひて處刑せられたり云々。

三二　暗殺を免る

ナポレオンが亦第一執政官時代の事なりき。一度爆發器の陰謀に遭逢したり。ナポレオン是に就きて他日語りて曰く、『クリスマスの日なりしが、余はオペラに招待せられたり。此の日余は終日執務したりし故、疲勞して眠りを催うし、ソーファの上に横たはりつゝありしが、ヨセフイーヌは來りて余を起し、其の速に劇場に赴くべきを促せり。余卽ち眠けを犯して起き出で、ラスヌとベッシエールを伴ひ、馬車に乘じて出で行けり。途上余は眠に耐へずして、屢々座眠を催しつゝありしが、俄にして、轟然たる爆發、余の耳朶を劈き、車は飛び上げられて、余は

恰も水上を行くの心地したり。これサン、ルジャン、イモラン等の陰謀者の企つる所なりき。之より先き、ヨセフイースの乘車と、余の乘車には、全くその構造外形を同うしたれば、兇行者は其の爆發を行ふの前、先づ余の何れの馬車に乘れるかを慥めんと欲し、イモランは大膽にも、馬車の中を覗けり。衛兵は無禮者なりとて、馬上彼を蹴倒せしに、彼は直ちに起き上りて、稍心亂れたりしが、余の馬車の少しく行き過ぎたるを知らで、恰も二つの馬車の間に、器具を突き入れ、爆發せしめたり。余の近衛兵の一人は、之が爲めに傷つき、其の乘馬は死し、此の外なほ馬の傷を負へるもの尠なからず。四五十の陪觀者も、亦た死傷したりしが、余は幸ひにして恙なきを得たりき。爆發器は、撒水馬車の裝ひせるもの丶中に、裝置せられて、警官の目を誑かし、街上に置かれたるにて陰謀者はピットが英國船にて送り來れる所、ルイ王も亦此の企てにあづかりつ丶ありしが如かりき』と。

三三　墺太利膺懲

ナポレオンの督政官を廢して、自ら第一執政官となるや、兵政の主權を掌握したるを以て、內は政府を鞏固にし、秩序の恢復を計り、經濟の發展を企及し、外は佛國の新憲法を否認せる英、墺の兩國を膺懲して、國威を發揚し、民心を收覽して、胸底の大志を達すべき機會を待てり。

時に墺國の老將メラスは、十四萬の兵を率ゐて、ピードモントに入り、春を待ちて、ゼノアを封港せる英の海軍と連絡し、進んでゼノアを經、佛境に入らんと欲せり。ナポレオン偵して之を知り、大軍を募りて、之を二軍に分ち、一をモローに附して、獨乙の内地を犯さしめ、自ら其の一を率ゐて、伊太利に入らんとし、一八〇〇年一月初旬、令を發して、デヂョン等後備軍を編成し、新聞をして第一執政官は、茲に兵士を閲せんと掲げしむ。墺英の間者行きて之を見れば、兵精しからず、兵器、服裝、極めて粗なり。何ぞ圖らん、ナポレオンは、秘密に眞個の後備軍を徴集して、計畫已に定まれるを。三月十七日、ナポレオン偶々其の書記

に向ひ、欣然として問ふて曰く、汝わがメラスを敗らんとするの地を知るか、書記おどろき、答へて曰く、知らず。可し伊太利の地圖を開け。余汝に示さんと、因りて針頭に赤黒を點じたるものを取り、敵軍の位置に黒を植ゑ、佛軍に赤を植ゑて、戰略を示して曰く、メラスは本營をアレキサンドリアに設く。ゼノア降らざれば、彼セントベルナードを去らざるべし。

余はアルプス山を此の點に越し、彼余の伊太利にあるを偵知する前、其の背後に出でゝ、墺國との交通を絶ち、スクリビヤの平原に追はん。サンヂリアノウに赤針をたてゝ曰く、此くの如くにして余はこゝに彼を破

らんと。是彼の有名なるマレンゴウの作戰計畫なり。

三四　アルプ越

ナポレオンは、伊太利を赴援せんと欲し、士卒を指揮して軍を進む。佛の伊太利に入るには、アルプ山脈を通過せざるべからず。其の道路の主なるものは、海岸道、コルチタンド峠、モングルノーブ峠、モンセニー峠、大小サンベルナル峠、シンプロン峠、セントコットハルド峠等なれども、ボー河の平原に出でんとするには、モングルノーブル、モンセニー、大小サンベルナルの四峠に依らざるべからず。此の中大サンベルナル峠は交通最も頻繁なり。ナポレオンは、之を越ゆるに決し、五月初

旬諸兵をアルプの麓に進め、別に二萬五千の兵を割きて、シンプロン及びサントゴットハルド峠より、伊太利に下らしむ。

大サンベルナルの最高點は、二四七〇メートルあり。盛夏三伏の候といへども、猶ほ積雪消けず。其の高峻想ふべし。瑞西より此の山道に入りて、伊太利の平地に至るまでは、其の間の距離約三十三里あり。

ナポレオン前衛ランヌ將軍は、十四日の夜之を越せり。蓋し晝間は、日光の爲めに、大雪崩を生ずるを以てなり。伊太利に面せる道は、頗る急坂なれば、砲は深谷に陷り、人馬顛倒し、艱苦名狀すべからず。一軍は前後八日を費して、平野に出づ。

三五　平和克復

既にしてポー河畔に於て、來援軍を合し、總軍八萬四千を以て、六月大いにマレンゴーの野に、墺の七萬の軍を破り、尋ぎてモロー將軍の引率せる別軍は、ライン河方面より、バワリアに入り、十二月墺のジオアン大公の指揮せる大軍をば、ホーヘンリンデンに擊ち、兩軍はウイーンに發向す。墺國皇帝は、驚愕惜かず。一八〇一年二月、リウネビールに講命條約を締結し、曩にカンポフオルミノ條約にて、規定せし條項を確認し、ライン左岸の地を佛國に割讓し、且つナポレオンが創設したる諸共和國の存在を認識し、爰に初めて平和克復す。

三六　天ナポレオンに幸す

ナポレオン一生を通じて、大小幾十戰せるを知らず。其の間兵馬を殺されたること十八九度に及び、又屢々微傷を負ひたり。されど軍醫の手あてを受けしは、僅かに一兩回に止まり、而も傷より發熱せしことすらなかりき。其のマレンゴーに於て、大砲の彈丸の爲め、左脚に穿てる長靴の一片と、皮膚の少許とを取り去られしことありしが、彼は之に對しては、鹽水にひたせる白布のきれを結び付けしのみなりき。彼の努力上進して、偉能殆んど人力の極みに達したるは、其の先天非常の才氣、之をして然らしめたるも、亦實に天彼に幸せし運命の致す所たらずむばあ

らず。

三七　已を咎めたる番兵を賞す

墺國と戰ひし際、一夕ナポレオン我軍隊の警戒能く備はれりや否やを見んと、假裝して各所を巡視せしに、岐路相合する所に至る。一人の番兵あり、銃を肩にして立つ。ナポレオン此所を過ぎんとす。番兵其のナポレオンなることを知らず。直ちに銃を擬して曰く、此の路を過ぐるを許さず。ナポレオン曰く、我は將官なり。陣中の警戒を視察せん爲めに巡回すと。

卒曰く、僕は貴下の將なると卒なるとを問はず。唯我が上官の命に由り

此處を守るものなり。何者たりとも、此の路を過ぐるを許さず。若し貴下にして果して我が主將たらば、愈々以て通過すべからざる筈なりと。ナポレオン止むを得ずして、舊の路に還り去る。翌朝其の番兵の性質を問糺すに、甚だ謹直なりとの報を得たり。直ちに彼を呼出し、其の嚴正にして能く軍律を守るを賞し、擢じて尉官とせり。

三八　進擊中の頓智

是亦墺國との戰爭の時、敵に向つて進行しつゝありしに、其の軍隊中より、一人の不平兵卒顯はれ出で、ナポレオンに向ひ、我が破れ裂けたる服裝を示し、叫んで曰く、吾等兵卒は、幾多の勝利を得、軍功を奏し

たるにも拘はらず。皆襤褸を身に纏へりと。ナポレオン此の言の進行を阻害せんことを恐れ、靜かに其の卒を見、且つ慰諭して曰く、汝勇敢なる兵士よ。新衣は汝の名譽ある傷痕を隱掩するを忘れたるかと。此の頓智なる挨拶は、大いに兵士等の心神を皷舞し、賞贊の聲、一時は鳴りも止まざりしとぞ。かくて此の言は一般軍隊中に話されて、益々ナポレオンを尊崇するに至れりと。

三九　早く刺客を知る

ナポレオンは、シエーンブルンにて、刺殺の陰謀に遭ひし事あり。ナポレオン曾て自から語りて曰く、維納を陷ゐれて、幾ばくもなくして、

余はシエーンブルンに觀兵せり。一人の少年の、年十八ばかりなるが、頻に余に近づき、何事をか語らんとせり。バルチエー之を見て喜ばず。強ひて少年を傍に押しやり、獨逸人たるラップを呼びて、此の少年の用事の何たるやを訊問すべきを依頼せり。少年答へて曰く、余は帝に奉つるに、一の記錄を以てせんと欲すと、ラップは余の忙しくして語るの暇なきを告げて、之を去らしめんとせるに、中々にきゝ入れざりしかば、性急なるラップは、少年をなぐり倒し、なほも之を引きづり行けり。軍隊の余の前を通過しつゝあるの時、少年は又もや執念くも出で來りしかば、ラップは兵士をして、式の終るまで、彼を捕へ置くべきを命せり。

少年は、此の間絶えず右手を胸の中にはさみ、彼が恰も貴重なる書類にても、其の中に藏めつゝあるものゝ如き狀をなせり。兵士之を怪しみ、手を出さしめて檢すれば、彼は其の上衣の下に、大なる匕首をかくし置けり。乃ち之を詰問すれば、彼は余を殺さんとせし旨を白狀したり。余因りて彼を召し來らしめて、彼が何事をなさんとするやを問へるに、余を殺さんとせし旨を明言し、其の何故なるやを問ふに及びて、謂つて曰く、陛下は余の國に向つて、大害を與へたるが故なりと、余曰く、戰爭の原因を作りしは墺太利帝なり。然るに彼を殺さずして、余に害を加へんとするは、何事ぞと、彼曰く、彼は愚人なり。假令彼を除くとも、彼

と同じ種類の人間は、又其の後を襲ふて出で來るべし。然れども陛下にして殺されなば、天下又陛下の如き人の、出生するを期すべからざればなりと。而して自己の此の事を躬行せんとするは、神命による旨を公言せり。少年はエールフルトなる僧侶の子なるが、無錢にして何人にも告げず、家を出で、途上携ふる所の懷中時計を賣りて、匕首を購ひしなりと云ふ。余醫を呼び、彼の脈を檢せしめて、其の狂人にあらざるをたしかめ、即ち命じて憲兵監視の下に、二十四時間彼を一室に幽し、其の間一食をも與へず。只其の好むがまゝに、冷水のみを與へて、其の動靜に注意せしめ、然る後又呼び出して問へり。汝を放つも、亦敢えて斯くの

如きの非望を企てんとするかと、彼答へんとして躊躇するものしばし、漸やくにして曰く、余は最早斷念す。何となれば、そは神命とは見へざればなり。若し果して神命なりしならば、最初の時に於て、余は必ずや成功したりしならむと。余は憫むべき彼を放たんとせしが、人々は彼が暗殺の企だての、決して之を以て止むの氣色なきを告げ、這般宗教的熱狂者の暴行は、其の最も怖るべくして、之を抑阻するに術なきを云ひたければ、余は止むを得ず、彼を斬に處せしめたりきと。

四〇　アミアン條約

ナポレオンは、既に對外抱負の一半を成就したりといへども、而かも

艦隊不足の爲めに、英國征討を斷行する能はず。心ひそかに之を憂慮しつゝありしに、偶然英國に政變あり。首相ピット國王と意見を異にし、一八〇一年二月、辭職し、對佛政策も亦變じ來れるを以て、茲に佛英の間、交渉を開始せられ、翌年三月を以て、アミアン條約を締結し、以て一時の平和を保持するを得たり。

四一　禍根を絶つ

ナポレオン列國と平和を結びてより、專ら內治に力を盡し、政府の權を固くして、文化の德澤を普く庶民に及ぼさんとし、先づ首として過激の共和黨と、頑陋の王政黨を一掃せんと欲せしが、一日偶々劇場に赴く

時、王政黨が地下に埋めし爆烈彈、ナポレオンの馬車を去ること十歩内に、轟然破裂して、陰謀發露せしかば、之を機會として、反對者を伺察し、或ひは囚禁し或ひは流謫して、全く其の禍根を絶てり。

四二　内治

ナポレオンは、其の佛國革命の際、外國に移住せるものゝ歸國法を立て、加特立教を再興して、宗教議式を回復し、又教育事業に意を注ぎて公立諸學校を設立し、運輸の便を計りて、水陸の路を通じ、土木を起して、各都市を壯麗にせる等、其の内治の改善枚擧するに遑あらず。特に老練の有司と共に、法典の編纂に從事す。

而して其の會に臨み、利害得失を辯論するに、微を究め精に入りて、專門學者をして後へに瞠若たらしむ。斯の如くして有名なるナポレオン法典殆んど二千三百條、近世最上の法典完成せり。今日文明國の法典は、皆之を根據とす。

四三　ナポレオン法典

ナポレオン法典は、前述の如く、一八〇四年に、編纂公布せられたる佛國民法を謂ふ。ナポレオンの力に依りて成りしを以て、此の名あり。ナポレオンが、第一總統官の職に在りて、未だ皇帝の位ゐに卽かず。法典編纂者中、年齒最も少なかりき。而して元來武人なるを以て、法律に

精通すべき筈なきに、頭腦明晰の人たるを以て、編纂者中の一人より。法律書類を借り、匆卒讀過して會議に臨み、白髮老齡の大家先生と議論を上下するに、簡勁奇拔にして、何時も之を屈服しき。

法典既に成りて、議會を通過せしむるに當り、苦心焦慮惜かず、或ひは法典に反對する議員を放逐して、議員制度を改革し、其の他種々の政略を用ゐて、辛うじて之を通過せしむ。當時若しナポレオン微かりせば、民法法典は成る能はざりしなるべし。

其の晩年セントヘルナに流謫せられたる時、回顧錄ともいふべき書を筆せし中に曰へるあり。『余が四十回の戰勝に依つて得たる功名も、ワー

トルローの一敗に依りて、殆んど抹殺せられたりといへども、唯だ其れ萬古長なへに存するものは予が民法法典なり』

四四　列國皆模範こす

其の法典は、ナポレオンの戰勝と共に、歐洲の一大部分に行はるゝこと、なり。白耳義又は瑞西の或る州に於ては、今日も尙ほ其の儘行はれつゝあり。獨逸に於ても、千九百年に帝國民法の施行せらるゝ迄は、其の聯邦中に佛法に據りしもの少なからず。また其の後特に編纂せる國々に於ても、皆佛蘭西法を模範とし、甚だしきに至つては、殆んど全く之れを飜譯せしが如きものを編纂せし國さへあり。伊太利、和蘭陀等是れ

なり。

四五　終身執政官

ナポレオンは、第一執政官となりて、權君主に等しと雖も、十年にして期滿つるを患ひ、永く其の任を繼がんとし、全國の投票によりて、遂に終身の執政官となり、又自ら其の襲任者を選むの權を得て、全く歐洲諸州邦の君主と權を等しうするに至れり。

四六　陰謀者を捕ふ

ナポレオン曾てピシユグリユーの陰謀に付きて、自ら語りて曰く『一八〇三年の八月、九月、十二月、及び一八〇四年の二月に陰謀者シユオ

ルジ。ピシユグリユー。テヴイエール。コヌテル。サンキクトル。ラヘー。サンイレール及び其の他の徒、離れ〳〵にベキーユに上陸せり。此の最後に、擧げたる四人は、曩に爆發機を以て、余を害せんとせし者なり。彼等は上陸せし地點に近き、一小農家に潛みて、密商なりと稱し、晝は隱れて夜のみ出で、身に多くの金子を携へて巴里に來り留まれり。警察は或る人の密告によりて、早くも陰謀のある由を知れども、其の徒の行跡を晦ますこと頗る巧なりしかば、之を探偵するに苦心せしが、漸くにして其の同志の若干者を、捕ふることを得て、彼等がアンジユアン公と共に、オツフエンブルグに寓したりし、ミユスセーなるもの〻使嗾、

により、費用を得て、此の擧に及びつゝある旨を知れり。余は其の陰謀者の姓名を、一覽したるに、其の中軍醫ケールといへるものゝ名あり。余は此のものゝ、必ずや金錢の爲めに、此の大膽なる企だてに加はりたるものなるべきを察し、死を以て之を脅かさしめて、彼をして其の實を吐かしめぬ。彼が判事の諮問に答ふる所に曰く、一八〇三年八月、英國よりヂョルジ其の他の人々と共に、此の地に來り、ヂョルジは目下巴里にありて、余を暗殺せんとしつゝありと。彼は又上陸地點より巴里に至るまでに、一行の泊せし家々を指示したり、卽ち直ちに人をバブイユに派して、ブーヴエード、ロヂエーといへる者を捕へ、又其の白狀する所

によつて、初めて此の異圖のモロー及びピシヒグリユーの企だてによるものなるを探り、モロー等を捕縛せり。ピシユグリユーは、其の友の一人の爲めに、十萬フランの現金を以て、警察に售られたり。ヂョルジは尙ほ市中に匿れつゝありしが、余は命じて巴里を圍ましめ、夜人の市外に出づるを禁じ、其の踪跡を嚴偵せしめしかば、三週日の後、彼も亦其の徒の密告により、捕縛に向ひたる者の一人を銃射したる後、終に縛せられたり。かくして徒黨のすべてが、縛に就きたるが、ピシユグリエーは、遂に獄中に縊死せり。

其の他のものは、公判を開かれて、ヂョルヂ。ポリニヤック。リヴイエ

ール。コステル。其の他の十六七人は、死刑を宣告せられ、其の中獨りリ、ヴイエールのみは、ミユラーの懇願によりて、死を減ぜられ、モローは、二ケ年の禁錮に處せられ、其の餘はすべて赦免せられき云々と。此れ等の陰謀者中、ピシユグリユーは實にナポレオンが、十才ばかりにして、ブリエンヌにありし時、數學の教授たりしものなり。彼は頗る數學に長じ、又大將としても、非凡の才を有し、遙にモーローに勝りき。此の事變は引て累を、アンジアン公に及ぼしぬ。蓋し陰謀者は、アンジアン公と共謀者にして、彼は恰も佛國の國境にありて、成否の急報を待ちつゝあり。事若し成らば、王位の要求者として、直ちに國内に入らん

としつゝある旨を曰へるによれるなり。ナポレオンは、之を默々に附するを得ずとなし、公を捕へて巴里師團の軍法會議に附し、彼を以て腕力を以て、共和政府に抗せんとするものなりとの、罪名の下に、死刑に處したり。公は公判の間、泰然として更に動ずるの氣色なく、終に刑に就けり。其のストランブルグに捕へらるゝや、彼は一書を草して、之をナポレオンに送りたりしが、タレーランは、公の刑戮を主張して、之を秘し、死後まで終に之をナポレオンに示さゞりしと云ふ。アンジアン公の刑戮は、頗るナポレオンが行爲の酷烈なるを難ずるものあり。彼、之を辯護して曰く、余は余の政治的生活のすべてを通じて、一の罪惡をだも

犯せしことなし。余はピシユグリユー、ライト（ピシユグリユーと共にナポレオンの暗殺を企だてたる者）其の他の人々を暗殺せしめたりとて非難せらる。されどこは全く無根なり。予はライトによりて。ピットが余に向つて、刺客を放ちたりといふ、事實を證明せんと欲したるが、彼は本國政府の意を蔽ふこと能はずして、終に自殺を決心せしなり。何故に余は又ピシユグリユーを殺さゞるべからざるか、彼の罪狀は明白なりき。されど余は彼の罪を赦し得たりしならん。余にして若しモローを暗殺したりと云ふならば、そは尙幾分の理なきにあらず。何となれば、余は何分か彼を懼るべき所以のものを有し、而も彼は世間一般よりは、無

罪の士なるを以て、目せられつゝありたればなり。ピシユグリユーは、英國の出費によりて衣食したり。其の當然死に處せられざるべからざるは明かなり。彼の暗殺せられたるにあらざるは、其の死狀を以てするも欺くべからざるに非ずや。アンジアン公に付ても、英人は往々にして、余が人をして、夜間彼を、其の獄中に刺さしめたる者を流布すれども、これ又全く僞りなり。

余は公然判廷に彼の罪を問ひ、之を銃殺したるなりと、彼又云へり。余は人間光榮の最頂點に達し、人をして自ら之を嫉むの情なき能はざらしめたり。人或ひは余を目して云はん。彼は如何にも權威、名聲の極を專

らにしたり。然れども彼は之が爲めに罪惡の多くを行ひたりと。されどこれ不當なり。余はかつて罪惡を行なひたることなく、又之を行なはんとするも、なしたることなし。余は常に大多數の意見と共に進行し、少數の意見に從ふこと少なくして、概むね多數者の希望に添ひ來れり。余はあまりに宿命論者なり。人類を賤視したるが爲めに、惡事を行ひてまでも、彼等の所業を妨げんとは思はざりしなり。余は常に五六百萬人の意見と共に進めり。果して然らば、何處にか余が罪惡を行ふの必要ありとする。余を讒謗する多きに拘はらず、余は更に余の聲名に付きて、懼るゝ所なし。何となれば、後世子孫は、余を正斷して事實を探り、余

の爲せる善と誤まりとを、比較すべければなり。余は其の結果に付きて徒らに痛心するを須ゐず。余にして若し成功せば、余は偉人の名を以て死すべく、又假令失敗すとも、なほ非常の人たるを以て目せらるべけんのみ。余には罪惡なきが故に、余の進達は前古實に其の比を見ざる所なり。余は五十度堂々たる戰ひをなし、其の殆んど總べてを打ち勝てり。余は法典を編纂せり。布衣の一匹夫より起りて、世界最强國の君主となり、歐洲を足下に屈服せしめたり。余が功名心の大いなる斯の如かりしと雖ども、そは冷然たるものにして、時の變と、時人多數の意見とによりて、惹起せられしのみ。余は常に主權の人民に在りて、存するを思へ

り。實に余の佛蘭西帝國と雖も、亦共和政府の一種類に外ならず。余は國民の聲によりて、其の首長となれり。予は常に成功が人の貴賤に關せずして、其の才能に關するものなるを信ぜり。予が此の人類の平等觀は、貴族主義たる英國の憎む所となりしなりと。

四七　皇帝の位に陞る

曩にアシインの條約に因りて、英佛和議を結べりと雖も、兩雄は長く兩立すること能はず。彼我些細の事より、互ひに條約を破りて、又干戈に相見えんとし、一八〇三年の末より、翌一八〇四年の末に至る迄、兩國盛に兵備を整へ將に一大戰爭を起さんとす。

然れども曠日彌久、空しく相持するのみ。翌一八〇五年に至りて、英相ピット更に諸邦を連合して佛に當り、終に又歐洲の大亂を起せり。

ナポレオン職に就きてより、既に五年、國民皆之に悅服すれども、猶ほ王政黨、極端共和黨の殘類、依然として其の陰謀を改めず。將軍モローも亦、近頃共和黨中に加はり、王黨と合してナポレオンを斃さんとせしが、事顯はれて、其の黨與と共に捕はれ、遠く外國に放たらる。ナポレオンが先王ブールボン家の枝葉、エンゼン侯を虜へ、佛國に敵し、兵を擧げんとせし罪ありとして、之を銃殺したりしも、亦此の際にあり。是に於て議員中、ナポレオン皇位に就かずんば、國家の安寧を望むべから

ずと唱ふるものあり。之を全國の投票に問へば可とするもの五百萬、而して此と共に、文學の名に於て、永遠の共和セイザアを有せず。ナポレオンを認めざるを論ぜざるもの三人あり。

ルマイシーヱ。ドユーシ及び、シャトーブリアン是れなり。終に輿望に依り、一躍して皇帝の位ゐに陞る。

四八　羽翼を作る

ナポレオン、帝位に昇りてより、鋭意帝國を建設するに力む。舊封建の貴族は、已に滅びて、ナポレオンは、今新貴族を造る。舊勳爵階級は已に地に落ち、ナポレオンは、今レヂオンドンフール（名譽員）新品級

を起す。

舊來至高の武官は大將なりき、ナポレオンは今元帥を作る、元帥の任命者左の如し。皆是れナポレオンに隨ひて、硝煙彈雨の間に馳驅せるもの門閥私寵は、毫も此の光榮に關せざるものなり。

ベルチーヱ　ミユーラー
モンセイ　ヂユールダン
マツセナ　アウゼロー
ベルナドツト　スウル
ブルール　ラール

モルチーエ　子イ
タブー　ケラルマン
ルフエーブル　ベリギアン
セルリエー　ベルトラン

爾來ナポレオン一世と稱し、ボナパルト家を皇族となし、部下有功の武將を元帥に任命する、斯くの如く、益々民心を收攬し、羽翼を作るに務むと。

四九　戴冠式

ナポレオンは嚮に一八〇二年國民の熱望に依りて、終身の統領官となり、一八〇四年更に一躍して、帝號を稱し、十二月二日を以て、皇帝戴冠式を、ノートルダームの大寺院に擧ぐ。法王ピウヌ七世、特に羅馬より來りて、新皇帝の頭に冠せんとす。ナポレオンは、ジョセフイーヌと共に、八頭の駿馬を以てせる馬車に乘り、親兵に護衛せられて寺院に入る。諸高僧之を神机の下に導き、法王近づきて、ナポレオンの頭と兩手とに聖油を注ぎ、高く聲を擧げて皇帝に宣し、又褥上より、帝冠を取りて、ナポレオンに授け、ナポレオン先づ自ら之を頭上に戴き、次で之をヨセフイーヌに戴かしめ、遂に之を褥上に返置すれば、法王肅然として座に返る。

ナポレオン是に於て、更に諸高僧の捧ぜる聖書に、手を加へて盟ふ。盟辭已に終れば、侍從高く呼で曰く、光榮至大なる佛國皇帝冠を戴き。正に帝位に就けり。皇帝萬歲と。全寺院皆一齊に呼で曰く、皇帝萬歲と。歡呼の聲、高く四邊に轟き、恰も雷の如かりき。

ナポレオンが、バラ將軍の知る處となり、ツーロン攻擊に、軍事的天才を發揮してより、僅かに玆に十一年、其の間毎戰向ふ所敵なく、武威天下に震ふ。曾て共和政治の萬歲を絕叫したる國民をして、再びナポレオン萬歲を三唱せしめたるが如きは、史上殆んど其の例を見ざるところ。何ぞ其れ偉なる哉。

蓋し大革命後の、兵亂騷擾を極めたる社會を救濟し、政道を整理するには、大偉人の出づるを要す。然らば則はち天、佛國の爲めにナポレオンをして之を一統せるもの非耶。

五〇　墺太利の役

是時に當りて、英國は墺露と聯合して、佛國と戰端を開けり。從來佛國の强敵は、卽はち英國なりき。ナポレオン奇計を海軍の將、ウィルニューブに授け、陽に軍艦を率ゐて、西印度海に赴き、英艦の尾擊を誘致して、遠海に到らしめ、其の虛に乘じて間を伺ひ、急に駛回して、一擧直ちに英の本國を襲はんとす。英將チルソン果して其の計に陷ゐり、英

國最精の軍艦を率ゐて、遠く佛艦に尾して、西印度海に赴けり。然るに佛艦途にして、俄に航路を回せるを以て、チルソン直ちに佛人の策略を悟りて、急に又其の跡を逐ひしが、或ひは之に及ばざらんを恐れ、別に快船を派して、佛人の策を英國に急報せしむ。こゝに於て英國政府は、別に兵艦を出して、西班牙の沿岸に於て、ウイルニユーブの歸航を邀擊して、大いに奮鬪す。佛艦破損を生じて港に入り、修繕を卒へ、進んで又英の海岸を襲はんとせしが、前路を遮ぎられて進むを得ず。またガデス港に碇泊す。

チルソン時に、既に本國に歸着し、直ちに大艦隊を率ゐて、ガデスに來

り、佛艦を誘出して、十月廿一日、ガデス港外、トラフアルガーの近海に、空前の大海戰を演ぜり。チルソン此の日必勝を期し、旗艦ヴイクトリア號に檣頭高く大旗を海風に飜へして、英吉利は其の國人の本分を盡すを望むと大書し、激浪掀飜、砲烟空を蔽ふの間、精妙の策略と、絶倫の勇氣とを以て、遂に大いに佛艦隊を敗れり。ナポレオン敗報を聽き、憮然として大息して曰く、嗚呼余一身、同時に各地に臨むを得ずと。

ナポレオンは、是より先き、八萬の兵を率ゐて、十月一日、ラインを渡り、六日、バワリヤに進み、十二日ミユーニッヒを下し、廿日ウルムを略し、十一月十三日、墺の國都ウイーンに入り、其の廿九日伊太利軍に合

し、十二月二日、その戴冠式の紀念日に當り、オーステルリッツの大野に立ちて、廿萬の墺露同盟軍に對せり。其の方略は、左翼はラーンを總督として、サントンにあり。左翼はスウルを將として、ソケルニッツの傍にあり。中軍はベルナドット及びミューラー之を率ゐて、悉く騎兵を集む。全線の後ろに、後備軍二萬人あり。内一萬人は、皇帝ナポレオンの親兵にして、ウードノー之を率ゐ、而して右軍に添うて、別にダブーの遊軍あり。是れ皇帝の奇計に出で、虚勢を張りて、敵を誘致せんとするなり。

果して魯軍高丘に留まりて、ボヘシアハンガリイの援兵を待つべかりしもの、今下りて我右翼を去ること、大砲彈度二倍の點より迂回して、我が右後に出でんとす。是れ素よりナポレオンの私かに望む所、魯軍此の躁急の擧動に出づるを見て、皇帝喜悦に堪へず。覺えず聲を擧げて叫んで曰く、廿四時間内、彼の隊我有に歸せんと、魯軍はナポレオンの陷穽に入り、佛の右翼を打たんとして、一大軍を遣はしゝが、ダブーの遊軍不意に邀擊して、之をレーゲルンに禦ぐ。ナポレオン直ちに此の機會に乘じ、スヴルをして、右翼の兵を率ゐ、突進して魯の左軍と右軍との交通をば、全く遮斷せしむ。魯帝此の危殆の一大事を來さんを恐れ、親兵を進めて、スウルの軍を擊退ぜんとす。兩軍プラソチエンの高丘に合し

砲烟天を蔽ひ、喊聲地を震はし、奮戰數刻、ナポレオン又ベッシイルを將とし、近衛の精兵を遣はして、魯軍を擊退せしむ。佛の中軍又一齊に進擊し、ミューラアの率ゆる騎兵隊の猛勢當る可からず。墺露の軍、佛軍の砲擊に全く敗れて、三軍齊しく崩潰し、陣後の氷湖を渡りて逃走せんとす。ナポレオン急驅し來り、砲隊を叱して曰く、時を失ふ勿れ。直ちに湖面を砲擊せよと。砲丸始めは空しく氷上を滑りしが、一人砲口を高く擧げて、彈丸を直下せしめしかば、氷面忽まち碎け、餘皆之に倣ひて、忽ち數千人の敵兵を沈溺せしむ。墺魯の軍、死者二萬人、生擒二萬人、其の餘大砲四十門、聯隊旗四十五旒、悉く佛國の手に歸せり。

聯合軍此の大敗に依りて、全く力屈し、遂に休戰を請ひ、次いで和を乞ひ、大いに土地を割き、且巨萬の償金を出せり。之に因て列邦は、ナポレオンが、佛蘭西皇帝兼、伊太利王の尊稱を認め、更にウエニス及びダルマシヤを割きて、佛國の版圖に歸せしむ。チーブルス王フエルヂナンドは、佛國との平和條約を破れるが爲め、其の位ゐを廢せられ、ナポレオンの兄、ジョゼフ之に代はりて王となる。弟ルイは、バダビア共和國を王國として之に君臨し、ミューラーは、ベルグの大侯國を受け、元帥ベルチーエは、ノエ、シャテル公となり、タレーランは、ベチベブトー公となれり。

是に於て佛蘭西帝國は、附庸隷屬の各王國、侯國及びバワリヤ、キルテンブルグ、ヘッセ、グルムスタット等を聯合せる所謂ライン同盟を合して、儼然たる一大邦と爲り、其の廣袤、古シャーレマン大帝の領土に等しきに至れり。同時に獨逸帝國は、建設以來、殆んど一千年にして、茲に其の名稱を失ひ、帝フランシスは、獨乙皇帝の尊號を去りて、單に墺地利帝と稱するに至る。時に一八〇六年八月六日、ナポレオン年僅かに三十七。

五一　機敏

オーステルリッツの戰爭前、部下の大將ミュラーガ、眼前敵將クッゾ

ーに欺かれあるを知らざるに、ナポレオンは、二日の路程も後方の、ウイーンに居りて之を察知し、其の不敏なるを一喝し、直ちに命を下して出發せしめたり。其の機敏驚くべきにあらずや。

我が秀吉が賤が嶽の役、身、大垣に在りて、中川清秀が戰死せるを聞き箸を投じて起ち、快馬に鞭ちて、賤が嶽に赴むき、遂に大いに敵に勝ちしと相似たり。

五二　士卒を愛撫す

オーステルリッツの役、ナポレオンは、墺魯の二軍を追擊し、還つて戰場に來れば、日既に暮れて人面を辨せず。乃はち左右に命じて發聲を

禁じ、能く傷者の叫號を聽察し、一叫を聽けば、乃はち馬より降りて親から之を慰め、ブランデー酒を與へて之を飲ましめ、終夜近衛兵をして戰場を巡視し、既に死したるもの丶外套を剝ぎて、未だ死せざる傷兵を被ひ、且つ傷者の傍らに火を點せしめ、盡く傷者を病院に送致するにあらざれば、退散すべからずと命じけり。

五三　英國攻擊

是より先き英國にありては、大宰相ピット死して、ホックス之に代はりしが、其の平和論者なるを以て、諸國皆、英佛兩國の平和を望めり。然れども幾何ならずして、ホックス亦死し、兩國互ひに疾視し、氷炭

相容れず。魯も亦英國が蹷足の意なきを惡み、遂に英國と合し、普魯西と結び、更に瑞典サクソニーを聯ねて、茲に所謂第四聯合を結べり。ナポレオン之の報に接して、忽ち兵を進め、一八〇六年十月七日、シューラア、ベルナドッド、ダブーの諸戰を歷て、十四日イエーナの大勝を得十六日、エルフルトに一萬四千の普兵を降し、廿五日長驅して、首府ベルリンに入れり。

戰雲亂れてより、纔かに七日、フレデリック大王の國は、佛兵の奪ふ所となる。廿七日皇帝ナポレオンは、ポツタムより、令を諸軍に下して曰く、諸兵よ。汝等よく我が期待に背かずして、佛蘭西國民の信用に答へ

り。汝等能く途に疲勞缺乏に堪へ、善く陣中に强勇と冷靜とを示せり。汝等は、眞に吾が王冠を保護する者なり。大國民の光榮を全うする者なり。汝等が此の精神を有せん限り、何人も汝等に、抵抗するを得ざるべし。吾人が作戰の結果を見よ。歐洲一等國中の隨一は滅絕せり。吾人の祖先が七年にして經過し得ざりし所、夫の深林フランコニアの諸砦、ザアレ、エルベの二大川、吾人は七日にして飛躍し去れり。其の間四回の會戰ありき。一回の大戰爭ありき。吾人は吾戰勝の譽を求め、ツダム及びベルリンに進めたり。吾人は六萬の捕虜、六十五旒の旗、六百の大砲三個の城砦、二十人以上の大將を得たり。而して我軍隊の半以上は、遂

に一發の彈丸を發せざりしを恨むに非ずや。

普魯西王國の全領、悉く我が手中にあり。諸兵よ。魯人は將に來らんとす。吾人は進んで彼に遇ふ可し。半ば彼が進路の勞を省くべし。彼は普魯西の中央に、他のアウステリッツを見ん。前役我が平和約定の寬大を忘れたる國民は、吾人に反して、成効するを得ざるべきなり。吾人は進んで魯軍に會すると共に、我が他の新軍隊は、來つて此地を護らん。我國民は普國の大臣が、惶恐失神して畫策せる休戰條約を憤る。將來吾人は虛僞の條約に欺かれざるべし。我が永遠の仇敵たる英國人は、大陸の秩序を亂し、海上の主權を掌握せん限り、吾人は斷じて我劍戟を收む

ること無からん。諸兵よ。余は胸中に汝等の愛を納む。汝等に對する余の感情を表するは、此の辭に勝るものあらずと。

五四　ベルリン條約

ナポレオン伯林に於て、大陸封港令を發し、英國との通信貿易賣買を悉く之を嚴禁し、英人の大陸にあるものをば、悉く囚人を以て之を目し、其の商品製造物、諸財産は、悉く之を沒收す。

英國が海上に於て主權を握りて、到底武力を以て抑制すべからざるが故に、ナポレオンは、終に此の窮策を以てせしなり。此の事忽ち歐洲の怨嗟を招きて、他日傾覆の禍を速めしは、惜むに餘りありと云ふべし。

普魯西は是れより先き、和睦の條件を提出せしも、佛人慊き足らず。飽まで威力を以て普國を脅やかし、殆んど全く之を絶滅せんと欲するが如き狀ありしを以て、普人憤懣に堪へず、又魯人と合し、殘餘の力を振うて、佛人に當る。佛人直ちに東に向ひ、進んでワルソーを拔き、プルチユスク、ゴリミン、アイロウの諸戰を歷て、一八〇七年六月十三日、大いに魯兵をフリイドランドに敗る。死傷捕獲六萬人、大砲百廿門、聯隊旗廿五旒、皆佛人の手に落つ。

此の時ナポレオンが下せる勅令中に曰く、ウインスチユーラ河より吾人は神敏猛鷙の如く、ニイメニ河邊に奔れり。汝等曾てアウスラリツに、

我戴冠式の紀念日を祝せり。

而して汝今第二聯合を亡ぼせるコレンゴーの勝利の紀念をフリイドランドに祝せり。嗚呼諸兵よ。汝等眞に佛國々民たるに耻ぢず。將に桂葉を纏ひ、意氣揚々國都に凱旋して、新たに平和の樂しみを享受すべきなりと。魯國終に和を媾じ、一八〇七年六月廿五日、ニイメン河上に筏を組み、佛蘭西皇帝ナポレオン、魯西亞皇帝アレキサンドル相會して、舊怨を釋き、新たに盟約を固うせり。ナポレオン語つて曰く、爾後兄は歐洲の東半を據守せよ。弟は其の西半を得ん。二人協力事を謀らば、天下は憂ふるに足らずと。普國又爰に於て、力屈して和を請ひ、三國使節チルシットに、和睦條約を訂結せり。サクソニイの王國に加へて、ナポレオン、又ウエスフアリヤ王國を建て、弟ゼロームをして、之れに君臨せしむ。

五五　葡萄牙征討

ナポレオンは一たび兵を出せば、攻むれば取り、戰へば勝ち、至るところ破竹の勢ひを以て、漸次隣邦を攻略して、其の版圖を擴張することを得たり。是を以て日に慢心を起し、暴威を逞しうし、機の乘ずべきあらば、益々侵略主義を採り、一八〇七年には葡萄牙がベルリン條例を奉せざるを口實として、三萬の兵を派遣し、其の首都リスボンを占領し、

尋でイスパニアが國王父子の間に軋轢あるを利用して、之に干渉し、一八〇八年、遂に國王父子を幽閉して、其の國土を奪ひ、之を兄ヨセフ、ボナパルトに與ふ。然れども兩國人は、彼の暴行を甘受するを肯せず。遂に英軍の助力を得て、佛兵を擊つて之を退ぞく。

爰に於てナポレオンは大いに驚き、十三萬の大軍に將として、イスパニアに侵入し、國都マドリードを占領し、再び兄ヨセフをして、入都することを得しむ。而かも國人は、益々反抗の氣色を明かにしたるを以て、ヨセフ、ボナパルトの位置は、頗る安定ならず。蓋し一八一三年以前に於て、最も頑强に且つ永續的にナポレオンに反抗したるものは、陸上にては、イスパニア及びロシア兩國人、海上にては英國人なりしなり。

五六　墺軍を敗る

ナポレオンは、猶イスパニアに滯陣せるに、從來怨恨を有せる、オーストリアは、此の虛に乘じて無慮三十五萬の大軍を募集し、將に佛國を衝かんとするを聞き、大いに驚きてスール將軍を、イスパニアに留め、自ら主力軍隊を率ゐて、一八〇九年四月墺軍を、アーベンスブルグ及びエックミューールに擊退し、更に猛進して五月ウイーンを占領し、更ニドナウ河を横ぎりて、七月カロロ太公の主力をワグラムに粉碎し、遂にオーストリア皇帝をして、ウイーン市にてナポレオンと會見し、多大の損

害を犧牲に供して、媾和を約し、且つ帝の長女、マリア、ルイザを彼に妻はすことを諾せり。

抑々ナポレオンが、其の最愛の妃ヨセフイーヌを離縁して、更にマリアと結婚せんとするに至りたるは、二箇の理由の伏在せるによる。其の佛國に君臨すべき嫡出の男子を得んとする希望は、其の一にして、歐羅巴第一流の名家と婚を約し、其の子孫をして、佛國に君臨するに足るべき門地を造らしめんとしたること、其の二なるが如し。果して然らば、ヨセフ、イーヌの境遇に對しては、そゞろに同情の涙を催さゞるを得ざるなり。

五七 武威赫奕

ナポレオンは、漸次其の領地を擴張したるに拘はらず。更に一八〇九年、ローマ法王ピウス七世が、ベルリン條例を遵奉せざるを責め、同年五月、法王領内を侵略し、且つ法王を、フオンテヌブローの離宮に幽閉し、尋いでオランダ王、ルイス、ボナパルトが、ベルリン條例を破りたるを責めて辭職せしめ、且つ其の所領を併呑したるを以て、領域は益々増加せり。

北はバルト海より、南は地中海に至り、東はニーメン河畔より、西はイスパニア半島に達し、歐羅巴大陸中、彼の命令を奉ぜざるは、トルコを

除けば、只僅かに英の一國あるのみ。其の勢威の赫々たること、有史以來其の比を見ざるところなりとす。

五八　露西亞征伐

ナポレオンは、露國がベルリン條約を遵奉せざるを怒り、之を征伐するに決するや、一八一二年五月、十五萬の軍に將として、巴里を出發し諸方の來援軍を召集し、總軍四十五萬を統率して、六月二十二日ニーメン河を渡り、途中殆んど何等の障害をも蒙ることなくして、八月十七日スモレンスク城に達し、翌日直ちに之を占領し、九月七日更にボロヂノ城に於て、ロシア軍を擊破し、九月十四日を以て、モスクバ市クレムリ

ン王宮に入るを得たり。

是れ一には佛の軍隊の優勢なりし爲なりと雖も、主としてロシア帝が、實戰を避け、民家糧食並びに馬糧等を燒棄し、佛の大軍をして、糧食の缺乏と、天時の酷寒とによりて、一大窮境に陷ゐらしめんとしたるに由る。故を以て佛軍入城したれども、忽まちにして飢餓に頻し、遂に民家に入りて掠奪を逞しうするに至りぬ。

而かも一方には狼籍の際、誤まりて火を失したるものあり、他方にはモスクバ市長の囚徒を解散して、故意に放火せしめたるあり。爲に火焰は炎々として、諸方に蔓延し、十四日の夜半より、十八日に至る五晝夜の

間、煙焔は天に漲り、十六日の暴風は、更に一層火勢を猛烈にして、さしも廣大壯麗なりし、舊都の大半をして、空しく一片の燒土と化せしめたり。

五九　ナポンオレの退却

ナポレオンは、十四日、入城後之を本營となし、令を諸軍に傳へ、書記官と共に事務を督勵し、深夜衾に入りぬ。然るに午前四時帝側に侍したる士官、倉皇火災あるを報ず。ナポレオン驚きて蹴然床を拂ひ、侍臣と共に王宮の窓より、此の大火を望見し、愁歎の情禁ずる能はざるもの、如し。

往昔ローマの勇將スキピオがカルタゴに遠征し、其の都城が火焔の中に包まれて、空しく滅亡したるを見て、榮枯盛衰、轉々循還して、異日ローマも亦火災に罹らんことを豫想し、萬感胸に迫りて憮然として長歎したりと云ふ。ナポレオンは此の實況を目擊して、果してスキピオと、同一の感想を抱きたるや否や、クレムリン王宮寂然として聲なく、全軍失魂したるもの、豈故なしとせんや。

ナポレオンは、火災の爲に、王宮の危險なるを察し、十六日本營を他に移し、ロシアが、媾和を哀願することを豫想し、滯陣すること三十五日、而かもロシア帝は、强硬の態度を採りて、敢えて和を媾はざりしが

故に、ナポレオンは大いに窮し、糧食の缺乏と、宿舍の不足とは、天候の漸次寒冷に向ひつゝあると相俟ちて、益々其の困情を高め、萬計既に盡きて施すべき策なく、遂に十月十九日此の都を發して、退軍するの己むを得ざるに至りぬ。

六〇　全軍の慘苦

時に天候沍寒、河水氷結し、降雪は霏々として行路を沒したり。防寒の準備なく、麤衣麤食殆んど飢餓に迫れる敗軍の將士が、此の寒天を冒し、氷雪を踏み、勇敢なるコサック騎兵の追擊を避けつゝ、退軍するの困苦は、實に名狀すべからず。兵士の大半は、困憊の極、非命の最後を

遂げ、其の屍は累々として路傍に横たはり。而かも寒氣に苦しめる將卒は、其の死骸より衣服を剝奪して、之を着用し、食に餓ゑたる兵士は、引率せる馬を屠りて、其の肉を食ひ、數百門の大砲を、途中に遺棄するの已むを得ざるに至る。事情既に斯の如くなるが故に、隊伍錯雜して規律なく、兵士將卒の分散、若くは死亡したる者、頗る多かりき。

六一　生き還るもの僅に八千

佛軍は、漸次退却して、十一月十三日スモレンスクに着せしが、此の間に兵六萬四千を失ふ、ナポレオンは、此處に軍を改變せんとして成らず。露の追擊に苦しみつゝ、廿二日ブレシナ河に達せし時は、露の別軍

は、既に對岸に達して佛軍を攻擊す。力戰四日、辛うじて一方の血路を開き、奔馳してウイルナニ向ひ、十二月五日殘軍の指揮をミユラーに托して、ナポレオンは巴里に歸還す。九日佛軍はウイルナに、十二日ケーニグスベルグに着す。

四十五萬の大軍生きて還るもの僅かに八千、露國も亦損害大いに、モスコウを出づる時、十二萬の軍は、ウイルナに於て五萬、オーデル河に於て、一萬八千に減じ、又約十萬の別軍は、普國ブレスラウに於て約三萬二千に減ぜりといふ。

六二　皇位を去る

ナポレオンは、斯る空前の大敗北より起るべき諸國の反動を豫想し、從者僅かに四人を伴なひ、倉皇巴里に歸着し、直ちに新兵の募集に着手したり。

モスクバの敗報、諸國に喧傳せらるゝや、ナポレオンの壓抑の下に屈服したる普、墺、瑞典、バワリア等の諸國は、直ちに佛國攻擊の大同盟を組織し、三十萬一千五百の同盟軍を以て、ナポレオンの統率せる十七萬一千の軍と、一八一三年十月ライプチヒの野に會戰して、雌雄を決することゝなりぬ。此の役ナポレオンは能く其の軍兵を統轄指揮して、奮鬪勇戰したりしが、衆寡敵せず、且つ其の兵士大率ね新募にして、訓練の

功を缺き、且つ實戰に經驗を有せざりし爲に、十八日の總攻擊に、空しく大敗を蒙り、翌十九日再び殘兵を收容部署して、開戰したりしが、大勢復た如何ともする能はず。僅かに七萬の敗兵を引率して、倉皇巴里に歸着し更に新兵を募集して衰勢を挽回せんとしたりき。

ナポレオンの武的優勝權に對する確固不動の信念は、稍々減退消失し、一八一三年、ライプチヒの大敗後は、此の信念は蕩然として地を掃ひ、從來鬼神の如く崇拜しつゝありし國人すらも、彼に對する崇敬の念を、減却するに至れり。是を以て、同盟軍が佛の四境を壓し、國運の危殆なること累卵も啻ならざる時に當り、敢えて大軍を託して、彼の武的天才

を圓滿に、發揮せしむることを許さゞりき。是を以て四圍の形勢は益々切迫してブリウヘル將軍は、プロシア軍に將とし、スワルツエンベルヒ公は魯軍を率ゐ、ウエリストンは、英軍に將となり、相前後して佛の國境を通過して、巴里に發向し、オランイエ公は和蘭に復歸して、兵を擧げ、ミウラー將軍は伊太利に在りて變心し、ナポレオンは、益々孤立の悲境に沈淪し、亦如何ともなす能はず。僅かに三萬の兵を以て、先づブリウヘルの大軍を衝きて敗北し、尋いで四萬五千の兵を以て、スワルツエンベルヒの軍と戰ひ、復た敗北したれば、一八一四年三月三十日、同盟軍の一部は、巴里城門に肉薄し、二十萬の大軍を以て、首都を包圍攻

擊すること十數時間にして、三月三十一日之を陷ゐれ、露國皇帝アレキサンデル一世、普國王フレデキ、ウイルレム三世は、威風堂々として入城し、尋で佛の外相タレーランと協議の結果、ブルボン家のルイス十八世を迎立するに決し、四月一日元老院及び立法院を召集して、ナポレオンの讓位を決議し、彼にエルバ島と毎年十八萬磅の補助金とを與ふることを許可したり。

六三　エルバ島を脱す

ナポレオンは、暫くエルバ島に在りて、天下の大勢を傍觀しつゝありしに、ルイス十八世の政治は、未だフランスの民心を滿足せしむる能はず。不平の聲次第に喧すしく、而かも、ナポレオンに約せし事を履行せず。又ヴイーンに集會したる列國委員は、亂後ヨーロッパの土地處分問題に關して、議論粉々として決定せず。

ナポレオン竊かに思へらく、余今フランスに歸りて、帝位に復し、又ヴイーン會議に於ける一派の者と氣脈を通じて再擧を圖らば、大事忽ち成るべしと、乃ち一八一五年二月、兵士千二百餘人を率ゐて、エルバ島を脱して、三月フランスの南岸サン、ジウアン灣に上陸し、直ちに巴里に發す。

沿道の民、皆皇帝萬歳を唱へざるものなく、勢ひ殆んど當るべからざる

ものあり。新王ルイス十八世は、王宮を捨てゝ逃遁したりしかば、ナポレオンは、其の月二十四日を以て、チユウレリー王宮に入り、再び皇帝の位ゐに卽けり。

六四　平和の攪亂者

ナポレオン既に、皇帝の位ゐに卽き、內閣を改造し、憲章を發布し、銳意治を圖り、人心の收攬すると共に、國運の恢興は、益々軍兵の强弱衆寡に在るを察し、令を全國に布きて壯丁を募りしに、二ケ月ならずして、隊に加はるもの二十萬に及べり。

是より先き、ヴイーンに會合したる列國の委員は、ナポレオン復位の報に接して、皆大いに驚愕狼狽し、ナポレオンを以て、平和の攪亂者、人道の公敵と罵り、急に征討の帥を發して、之を鎭壓せんと欲し、佛國に向つて、宣戰を布告せり。

ナポレオンは、常備軍十二萬を基礎とし、免役兵捕虜の歸還者新募兵等を集め、約三十六萬の軍隊を編制して、四境の守備とし、七月までには之を二陪にせんと計畫せり。

然るに六月の初め、英將ウエルリントンは、兵十一萬七千砲三百餘門を以て、ニーデルランドに集合し、普將ブリユッヘルは兵九萬砲二百餘門を以て、メウズ河谷に進入し、其の他墺露の軍約五十一萬は、ライン河

酣に集まる。

ナポレオンは、其の三十六萬中より、兵十二萬五千、砲三百五十門の一野戰軍を編成し、英普兩軍の中間に突進して之を兩斷せんとす、六月十五日シャルロアに進みしが、敵軍はナポレオンが斯く猛進せしを知らずして、十四日迄尚廣く舍營せり。然れどもナポレオンの將官中、敵に降れるものありし爲め、此の計畫は普軍に洩れて、普軍は十四日よりリグドに、英軍は十六日より、カートルブラーに集合す。

ナポレオンは、約五萬の一軍をネーに委ねて、ブリユッセル方向に前進し、ウエルリントンの來援を遮斷せしめ、殘餘の主力、約七萬五千を以

て、リグニーに於て普軍を擊つ。

敵兵敗れて北方ワーブルに却ぞく。時にネーは、カートルブラーに於て五萬の英軍と戰ひ、終に敗れて退ぞく。

六五　ワーテルローの激戰

十七日ナポレオンは、グルーシーに兵三萬を率ゐて、ブリユッヘルを追擊せしめ、主軍をカートルブラー附近のネー軍に合す。ウエルリントンは、普軍の退ぞけると、ナポレオンの前進せるとを聞知し、ワーブル附近の普軍と連絡し、首府ブリユッセル掩護の爲め、ワーテルロー附近に退ぞき、防禦せんとす

ナポレオンは、之を追躡して英軍の陣地前約四キロメートルの地に止まり、明日の攻撃準備をなす。然れども、リグニー戰鬪の結果を過信し、英普兩軍の連絡せんとするを遮らんともせず。グーシーをして、ワーブルに前進し、却つて普軍をして英軍に逃げ去るを得しめたり。

時に英軍は兵六萬七千、砲約百六十門にして、内約一萬二千は騎兵、佛軍は約七萬二千、砲約二百五十門、内約一萬六千は騎兵なり。

十七日の夜、大雨沛然として降り、盆を覆へすが如く、道路の泥濘人馬を沒し、銃砲輜重の輸送も、亦極めて困難なるを以て豫定の行動を採る能はず。翌十八日も、朝來細雨尙歇まず。

午前十一時に至つて戰端を開き、正午佛軍は英軍の正面に展開して、其の中央と左翼とを攻擊せんとするに當り、佛軍の右後方約五六キロメートルに、墺兵三萬を見る。ナポレオン乃ちネーに之を攻擊せしむ。地形の險惡と、英の步騎兵の力戰とに由つて、敗る能はざりしに、遇ま英の輕騎兵約五六百、佛の砲兵に突進して、縱橫當るべからず。佛軍の鋭鋒之が爲めに其の挫く所となる。

六六 大敗北

時にナポレオンは、普軍の進むを見て、騎兵約三千、步兵約一萬を以て之に當り、再びネーに攻擊せしめ、英軍の陣地約六七百メートルに接

近せしが、其の間普軍に對せし佛軍は、本軍に壓迫せられしを以て、援兵若干を送つて、普軍の到着前に英軍を敗らんと欲し、騎兵の大襲撃を命せり。然れども却つて逆襲する所となり敗走す。更に復た之を襲へども勝たず。

又最後の豫備隊を以て英軍を撃たしむ。英軍却つて佛軍を敗り、其の普軍の援助を得て、其の鋭鋒當るべからず。佛軍大敗す。ワーブル方面に普軍を撃退せる、グルシーは、途上ワーテルの砲聲を聞きしが、ナポレオンの勝敗を知らざれば、其の間距離相近きも、來り援はず。普軍は新手の騎兵を以て、急潮の如く佛の敗兵を追撃す。佛は支ふる能はずして

ラオンに追却せり。

六七　我が死すべき秋

戰爭の正に終らんとする時、佛兵の突喊は先づ敗れて敵の騎兵は既に風雨の如く進撃し來り、其の一部分は歩兵と合して、ナポレオンの身邊に近く襲ひ來れり。ナポレオン乃ち令して、之を撃退し、大聲叫びて曰く、是れ我が死すべきの秋なりと。馬に鞭ちて、敵中に突進せんとす。スール乃はち諸將と共に、涙を揮うて固く轡を取りて之を止めて退ぞかしむ。

ナポレオンは、終に將卒に擁せられて、巴里に向ひて去る。數日の激戰

に身心疲勞困憊し、途上屢々馬より落ちんとせしが、從者の助けに依りて、六月二十一日を以て巴里に歸る。

六八 貶謫

されば巴里滿都の驚愕騷擾、殆んど名狀すべからず。ナポレオンの威信全く失墜し去り、翌二十二日位ゐを退ぞき、又皇位を其の子に嗣がしめんとせしが、佛國議員中の多くは、之を肯せず。尋ぎて合衆國に逃走せんと欲せしも、海路梗塞、志を達する能はず。

七月八日、ルイ十八世再び巴里に入る。ナポレオン遂に七月十五日を以て、英艦ベレロフォン號に投じて、英國に護送せられ、尋ぎて列國會議の決議に基きて、一八一五年十月、セントヘレナ島に貶謫せらる。

六九 列國會議

ナポレオン流竄の議、一決せらるゝや、英國はナポレオンを以て、獨り英國の捕虜とはなさで、歐洲列國共同の捕虜を以て見做さんとし、列國と共に一八一五年八月二日を以て、一の條約を訂結したり。

曰く、各國委員をセントヘルナに派遣して、之をしてナポレオンが監禁の樣を視察せしめ、又屢々之に面會を求めて、其の逃亡せざるをたしかめしむべしと。普魯西、露西亞、墺太利、及び佛國の諸國、皆之に調印し、各々一人の委員を指命したるが、獨り普魯西のみは、此の笑ふべき

企だてには加はらざりき。

七〇 抗辯書

ナポレオンは、七月十五日、英艦ベレロフオン號英國に向つて航し、二十六日プレマス港に入りぬ。三十日英政府の使來りて、セントヘルナ流謫の命を傳ふや、ナポレオン怒りて抗辯書を草して曰く。

『余は有意的にベレロフオン號に來れるなり。余は英國の捕虜に非ずして賓客なり。余は船長が彼の政府の命に依りて、余及び余の從者を迎へ、余にして又望まば、英國に余を伴なひ行くべきを告げたれば、實に此處に來り、英國の法律の下に、之が保護を求めんと欲したるなり。余はベレロフオンに到れると共に、既に余の家にあり。又英民の中にあることを思へり。若し船長をして、余及び從者を迎へしめたるものは、英國政府が余を欺かん爲めの手段にてありしならば、是れ其の名譽を傷つけ、其の國旗を汚すの行爲なりといふべし。是に由りて之を觀れば、英人は既に公義、及び法律等に關して、歐洲に誇るの資格なきものなり。ベレロフオン號が、如何に余を優待したりとも、爲めに英人の信用は、損失せられたるなり。敢て問ふ。二十年の間、英國と戰ひたる敵が、時利あらずして、英國法律の保護を求めんが爲めに、刃を逆にして故さらに茲に來りしものは果して何の意ぞや。即ち

敵國を敬して、之を信ずる厚き所以なり。然るに英國は、余を優遇すと稱しつゝ、今其の掌裡に歸するや、立どころに之を犧牲に供したり』と。

七一　セントヘレナ島

セントヘレナは、一五〇一年五月、葡萄牙の航海者、ジョアオ、ダ、ナヴァ之を發見す。

南緯十五度五十五分二十六秒、西經五度四十二分三十秒に位ゐし、亞弗利加大陸の西方、大西洋中に孤立す。長さ十哩半。廣さ十哩餘にして周回二十八哩あり。

穀類は到る處に成長し、又馬鈴薯は其の特産物にして、年々三回の收穫あり。バナナは能く熟し竹及び珈琲又多し。

島民無學頑愚にして、容貌も亦醜くし。食物は主に海産魚類の鹽肉及び米等にして、鳥獸の鮮肉は富家ならでは食する能はずといふ。

七二　讀書自ら慰む

既に流謫せられて孤島にあり。閑寂に堪へず自ら慰むるものは、只だ讀書の一樂あるのみ。新聞雜誌書籍の歐洲より新たに着せし時は、雀躍して親ら槌と鑿とを以て箱を開き、一室に閉ぢ籠りて、何人にも面會せず。數日の間之を耽讀せり。

曾て曰く、余は家屋及び家具を與ふるよりも、書籍の四百冊を贈れ。家屋の建築には一兩年を要すべし。余は或ひは其の間に、現世の人たるを得ざるべし。又然らざるも之が爲めに、多くの兵士水夫の勞力を要すべく、斯くの如きは余の甚だ欲せざる所なりと、彼は、此の島中に於ても二千七百冊の書籍を有したりといふ。

七三　最後

ナポレオン既に、蠻煙瘴雨の孤島に在り。怏々として樂しまず。又監禁の嚴密冷酷に加ふるに氣候不順と、風土濕源との爲めに、身体大いに衰弱し、一八二一年五月に至りて、病勢危篤に陷ゐり、枕頭屢々譫語を

發し、時々ヅゼーよ。マッセナよ。我軍勝たん。進め。擊て等の事を叫び、次第〳〵に人事不省となり、六日の夕眠るが如く、溘焉として絶息す。

嗚呼、一微賤の士官より身を起して、忽ち風雲を叱咤し、滿腹の韜略戰へば必ず勝ち、攻むれば必ず取り、其の軍の向ふ所、秋風の枯葉を拂ふが如く、殆んど之に抗するものなく、歐洲の天地を蹂躙し、武威、世界を震撼せし大英雄も、ワーテルローに一敗して、復た起つ能はず。終に貶謫に逢ひ、形影相吊して孤寂無聊の中、終に病ひに斃る。

其の半生の雄略壯圖を顧み、其の悲慘の最後を尋ねて、人生榮枯盛衰の

速やかなる斯くの如きを見て、曷んぞ一掬の涙に咽ばざるを得ん哉。

七四　遺骸を葬る

五月八日、遺骸を四重の靈柩に納め、其の佩用せし劍を其の上に安置し、彼がマレンゴの役に着用せる外套を以て之を掩ひ、道路險惡にして柩車を用ゐる能はざるが故に、イギリスの壯兵之を肩にして、其の生前好んで散歩しつゝありし楊樹の下、泉水の邊に葬りぬ。

七五　改葬

後ち一八四〇年五月、フランス國王ルイス、フイリッポは、イギリス政府の許諾を得て、軍艦をセントヘレナ島に派遣し、其の墳墓を發掘し

て、遺骸をパリに護送し、同年十二月十五日、鄭重なる儀式を以て、セイヌ河畔の廢兵院内に改葬したり。蓋しナポレオンの遺言の中に『余は余の遺骸が、余の常に敬愛したるフランス人の中、即ちセイヌ河畔に葬られんことを切望す』とあるに從ひたるものなり。

尋ぎて、ビスコンチの設計に基き、一八四三年より、一八五三年に至る十ケ年の歳月を費やして、雲班石を以て壯麗なる墓石を築造し、以て其の偉蹟を千載に傳ふることゝせり。古來英雄豪傑の墳墓の見るべきもの尠なからずといへども、彼の切きは、其の最も宏大に、最も華麗を極めたるものなり。

七六　稱號を保持せん

ナポレオンの、最も不快に堪へざりしは、已れに對する英人の稱呼なりき。彼の初めてセントヘレナに至るや、提督コッバーンは、舞踏會の招待狀に於て、ボナパルト將軍と云へり。ナポレオン此の書を覽て、之を其の近侍に示して曰く、之をボナパルト將軍に送れ、彼は曾て金字塔の下及びタボール山下にありしと聞けりと。蓋し是より先きナポレオンの廢黜に決せらるゝや、英國政府は、命じてナポレオンの帝號を去り、呼ふに將軍ボナパルトの名を以てせしめたるなり。

ナポレオンは、之を以て、非常の凌辱とし、事苟くも此の點に及べば、

力を極めて人の之を唱ふるを斥ぞけたり。曰く余は佛國に於ける主權者の位地を去れり。されど席位をば去りたるにあらざるなり。余はもとより自ら佛帝ナポレオンと稱せずして、只ナポレオン皇帝と稱す。

凡そ君主は、一般に已れの稱號を保持するものなり。西班牙のカルロスの如きは、其の子に讓りたるの後に於ても、なほ其の國王及び陛下の尊號を用ゐたるに非ずや。余、若し英國にあらば、余は皇帝とは稱せざるべし。然るに英人は、余をして佛人が恰も余を其の君主となすの權利なきものゝ如くに見へしめんとす。

彼等にして余を帝となすの權利を有せざるならば、又余を將軍となすこ

とも不可能なるべきの理なり。思ふに人の帝となり、君主となる、皆各人の成功にかゝる。英國も當初は、ワシントンを目するに、反賊を以てし、其の國の憲法を認めざりしに非ずや。すべて偉人を作るものは、成功なりと。

七七　侍臣遺志に背かず

ワーテルローの戰ひに於て、傷を負ひし人にナポレオンの厚き待遇を受けたるものあり。其の人の同胞の支那に駐在しつゝある者、之に對し感謝の意を表せんとて、好便に托し、將棋の駒をナポレオンに贈り越したり。然るに知事は、之を檢査して、其の上に席冠とナポレオンの頭字エヌとを刻しあるを見て、之を渡さゞらんとしたりき。

又逝去の三週日以前、ナポレオンは自己の好意を表せんとて、コールのマールボロー傳を、セントヘレナ守備隊たる第二十聯隊の士官連に贈らしめたるに、其の書の書名頁に、皇帝の稱號を認めしかば、知事は又之れを拒斥せしめ、士官をして送り返さしめたり。

ナポレオンの死するに際しても、其の臣下は彼が出生の場所、時日及び逝去の時日を其の櫃にしるし、且其の上に、ナポレオンなる文字を記せんことを切望しけるも、知事は、獨りナポレオンの字のみにては不可なり。ボナパルトなる姓字をも加へざるべからずとて可かず。

然れども此の文字は、實にナポレオンの生前に於て、最も之を用ゆるを厭ひたる所なるを以て、侍臣は故帝の遺志を沒却するに忍びずとし、終に何等の姓名文字をも認むることなくして、無名の棺を葬りたりき。

七八　英雄の閑日月

英雄の胸中悠々たる閑日月あり。干戈を把つて他邦を併呑し、轉乾旋坤、不出世の英雄ナポレオンは、亦美術を好み、之を奬勵す。畫家ダヴイドは、クラシック派の棟梁にして、從來の技術が非常に淫靡に流れ、殆んど滅びんとしたりしを、奮然起ちて之を挽回に努め、遂に今日の隆盛の基礎を造れり。

ダヴイドは大いなる援助を與へて、其の志を成さしめたるは、實にナポレオンにして、故にダヴイドの傑作として、今日迄世に存するもの〻多くは、ナポレオンの事蹟を畫けるものなり。

七九　躬耕

ナポレオン、セントヘルナ島に在り、晩年に及びて、戸外運動を試むること甚だ少なく、身体頗る不活潑となりしかば、曾て之を侍醫、アントマルシに語りて、その虚弱となれるを嘆ぜしに、アントマルシは勸むるに土耕すべきを以てせしかば、ナポレオンは是より農事に慣れたる自己の式部官ノヴアレーを園丁長とし、自ら之が下に勞働したり。これ實

に一八一九年の末より、翌年の前半に渉りての事なりき。

ナポレオンは、鍬を手にし、ジャケツを着、廣胖なるヅボンと、赤き上靴とを穿ち、又鍔の頗る廣き、麥藁の大帽子を被りて、頻りに働き、邸内に數多の草木を買ひ入れて、柳、槲及び桃の類を植ゑ附け、土地を耕しては、空豆、豌豆等此島に生じ得べき野菜類を蒔き、又地を鑿ちて、涼しき洞窟を造り。新たに多くの綠藝を庭園内に作くれり。即ちアントマルシを呼びて、已れが鍬の使ひ方を巧みになれるを誇示して曰く、醫師よ。卿は卿の患者の順徒なるを滿足するなるべし。こは卿の丸藥を服するよりも、遙に樂しきなりと。

初め彼は、疲れ易くして、自己の弱きを嘆じたりしかど、後次第に慣れて、ロングウッドなるすべての侍臣に勸めて、之に從はしめたり。又獨り男子の勸誘のみを以て滿足せずして、更に女子をも誘ひ入れんと欲し殊にベルトラン夫人にすゝめ、種々なる口實の下に、之を謝せんとするの苦痛を見て、笑ひ樂しめり。

又此の土堀りの序を以て、步兵を以て、騎兵の突喊を擊退するの方法を研究し、天明鐘を鳴らして、諸々の伯爵式部官より、厨夫奴僕に至るまでを徵集し、之をして盡く土を開鑿して、長く濠を穿ち、其の堀り上げたる土をば、濠の後ろに積み上げしめ、之によりて、十列の步兵、若

し彈丸を連發せば、優に騎兵の來襲を拒ぎ得べきを示したり。

八〇　金をボーイに借る

ナポレオン、平生好んで潛かに巴里の市中を徘徊す。鼠霜降二重釦、ツメ襟のフロックコートに、鰐廣の柔かき釜帽子を冠り、早朝獨り潛かに巴里の市中を徘徊す。其の最も好みて到れる處は練兵場にして、そは練兵を見んが爲めなり。又時としては、侍從長のヂュクロー大將を隨がへり。

曾て侍從長と共に市中の各種の大工場を見廻りしが、殊に注目せしは、其の工事の進渉の狀況なり。

ヴンドーム寺院の塔の、宏大なる工事を殘る隈なく視察せる後、復た市中を徘徊せしが、街頭家々未だ起きざりしかば、共に市民の懶惰を慨しつゝ、とある東洋物品販賣店の前に出づ。

店は兩側の四阿亭の如きものを屬し、四阿亭は區劃せられて、一方は料理店なり。是れ巴里の富豪紳士等出入する所とす。ナポレオン頗る空腹となりしかば、此處に入りて飲食し。やがてヂュクローは、代價四圓八十錢を支拂はんとせしに、携へ來れると思ひし財布なし。ヂュクローは大いに驚きて躊躇す。

ナポレオン之を知らずして、歸るを促がす。ヂュクロー遂に店の主婦に

請うて曰く、余等は近衛の將校なり。今朝偶々財布を忘る。一時間内には、必ず屆くべければ、それ迄猶豫せられんことを、主婦肯かず。時にボーイ傍に在りて之を見、主婦に對つて曰く、『斯かる立派なる將校の方々に於て、料理屋の此の貧賤なるボーイを欺かるゝこと萬あらじ。僕之を立替へ置かん』とその面前に金を差出せり。二人依りて歸るを得たりヂュクロー途上之をナポレオンに語る。

翌日一人の傳令將校來りて主婦に面し、昨の客は皇帝陛下と、侍從長閣下なるを以てし、又其ボーイに面せんといふ。主婦大いに驚愕惜かず。傳令將校は、皇帝陛下よりの一千フランの金を謝禮として賜ふ。ボーイ

後召されて宮廷の舍人なるといふ。

八一　天と人とは余を苦しむ

セントヘレナ島に在りて、其の庭園に植物を移植して、水に乏しきに困したりしかば、大いなる水溜を備へ、樋を裝置して、新たに水を八九町の彼方より、運び來らんとし、而して此の大工事に向つては、邸内の佛人の少數にして、到底其の勞に堪へざるを以て、多くの支那人を雇使し、此等の勞働者の、炎熱に苦むの樣を見ては、已れが頂きしものに等しき帽子を、一つゞつ彼等に配與したり。

かくて樋も掘られ、池も出來上りしかば、此の度は手づから池中に金魚

を放ち、之にパンを投げ與へ、其の游泳の樣を熟視して、之を人の行動に比しつゝ樂みしが、此の水溜の庭に銅盤ありて、水を毒せし爲め、金魚は次第に斃れしかば、彼は之をアントマルシに嘆きて曰く、余に屬し余が愛せる總べてのものは、忽まちにして滅ぼさるゝなり。天と人とは相同盟して余を苦しむが如しと。而して彼は雨天の際と雖も、日々必ず之を見舞ふを怠らず。其の生き殘れるをば取り上げて、悉く之を他の桶に轉じたりき。

八二　黄白に淡し

金錢に對しては、極めて淡泊なりき。彼の總司令官となりて伊太利と

戰ふや。小國の諸公は爭ふて賂賄を呈し、寛大の處置を請はんと欲す。ナポレオン一々之を拒みて受けざりき。又伊國に進入せんとせし時、佛國政府より兵糧彈藥等は、一切之を支給する能はず。自辨たるべしとの申し渡しあり。

ナポレオン亦之を諾して出馬せり。されば沿道の人民に軍用金を命じたりしかど、剩餘あれば、之を本國に送り、或は他の方面に於て戰ひつゝある大將に送りたり。

八三　金品の分配方

又初めて、コンシュルとなれる時、二人の同僚、宮中に誰も知らぬ金

品あるを發見し、之が分配方をナポレオンに相談したるに、ナポレオン拒んで從はず、却つて大いに怒り『卿等取らんと欲すれば取れ。予は一錢一品をも手にせず』と。同僚大いに慚愧す。又骨牌戯を好み、時に近侍の者を集めて勝敗を試み。假令勝ちたりとも、其の穫たる金子は必ず一同に返戻せりといふ。其の黄白に淡き、以て之を知り得べし。

八四　一身殆ど危し

ナポレオンが戰爭中九死に一生を得たる出來事あり。これ即ちブリエンヌにて、哥薩克兵の虎口を脱せし事なり。ナポレオン自から語りて曰く、二十又は二十五の露兵は、余が軍の一翼を圍み、而して砲兵隊中に

突喊し來らんとせり。時恰も薄暮なり。彼等は我等の方に來りしが、余のナポレオンたるを知らず、余も亦彼等の露兵なるを知らずして、我が士卒なるべしと推察しき。

然るにコーランクールは、早くも其の敵兵なるを發見して、余に告ぐるに、其の敵中に陷ゐれるを以てしたり。我軍は即ち急に之を射擊し、彼等の一人は、其の手の我膝と相觸るゝまでに、我に密接し來り、彼の手にせる鎗の柄は、余の身体に觸れたり。余は拳銃にて、彼を射んとせる間に、彼は早くも走り去れりと。これ實にグールゴーが、君主の急を救ひたりと稱する出來事なりき。

八五　殖産興業

佛國の總人口は、一八〇〇年頃には、約三千萬にして、農業最も多く穀菽、根菜及び秣料を栽培し、殊に南部地方に在りては、葡萄、桑樹、玉蜀黍、煙草、橄欖、柑橘類を栽植す。又家禽の外は、牛、馬、羊、豚等を畜なへり、

ナポレオンは、外國征討、及び國際關係に、忙殺せられたりしかど、內地の殖產興業にも、大いに注目して、往々面目を一新する所あり。然れども、不幸にして、在世の短かりし爲め、其の實績の顯はれざるもの多し。

八六　農業法規

法典を編纂して、民法の改正と共に、農工業顧問會員、地方官、農業者及び農會員等より、農業法規委員を命じて、同法規を編纂し、一八〇八年に完了せり。

其の第一編は土地及び地主の權利、第二編は地主相互間の關係、第三編は土地に關する政府の保護干涉を載せ、全編通じて、二百八十條なり。又掘割及び浚渫業に關する法規を定め、此の種の事業は、一切政府の監督を要することゝし、從來山林濫伐の爲め、砂石を押流して、河底を埋塞せし害を除き、農業上に大利益を與へたり。

一八〇七年の法律には、町村の境界を正し、且つ三角測量に由つて、其の面積を積算し、又一地區毎の面積を計り、同時に農地に等級を付して五等に分てり。

而して既往十五ヶ年の中、最豐及び最凶各々二ヶ年を除き、殘り十一ヶ年の平均收穫を目安として、委員の協議鑑定に基づきて、賦稅額を定めたりき。

八七　牧畜及び栽培

其の他飼馬所を設け、獸醫學校を立てゝ、馬匹の改善を謀り、軍馬及び常用馬匹の面目を改め、又メリノ種緬羊を輸入して、在來種の改良を

謀り、羅紗製造業を奬勵せり。

一八〇九年には、製糖試驗場を設け、大いに製糖事業の發達を圖り、同時に賞金其の他の方法に依りて、甜菜根栽培を奬勵せり。

一八一二年には、徵稅其の他の關係より、政府に於て煙草の專賣を行なひたれば、地主中、耕作の成蹟良好なるものは、地方長官をして毎年報告せしめて、之に褒賞を與へて以て大いに奬勵せり。

八八　動物の本能

ナポレオンは、其のセントヘレナ島に在りし時、殊に動物の本能を觀察して、之を人類と比するを好みしが如し。雨の降りしきりし時の事な

りき。蟻は地中に穴を穿つこと能はずして、糧食の探索に隊をなして、ナポレオンの寢室に入り來り、砂糖を載せ置きたる机の上に這ひ上りて之に群がれり。

ナポレオンは、ふと之を發見し、敢て其の働作を妨ぐることなくして、只時々糖塊を搖り動かし、小虫の勞役と勉强とを見て、竊かに讃美せりかくて二三日の間、その儘に之を放置したりしが、やがて戯れに水を砂糖の周圍に流して、なほ彼等の之に處する有樣を觀察し、終には酢の液を以て糖塊を取り卷き、蟻の之に近づき來らざるに至つて已みたり。

八九　野外逍遙

平生百事に忙殺せられ、寸刻の閑なかりしも、時には書齋を閉ぢて、終日サン、ジエルメンの林中に狩獲することあり。又時に馬を御して市中又は公園に馬車を驅けることあり。然れども馬を御するの術は、熟練せずして、往々失策談ありしといふ。

九〇　演劇を好む

演劇を好み、夜る暇あればオペラ座、或はフランス座に赴けり。喜劇よりも寧ろ悲劇を愛し、特にコルネーユの作を賞し、曾てゲーテとの對話中に『悲劇は君主、及び人民の高等學校なり。その効果は歴史以上なり』と。

又『悲劇場は偉人の學校なり、之を奬勵し之を擴張するは、人の精神を温め、心懷を高尚にし、偉人を作り得るものなり。此の點より見れば、フランスが成せる赫々たる事業の一部は、コルチーユの悲劇に負ふといはざるを得ず。彼若し今存在せば、予は彼に授くるに公爵の榮位を以てせん』と。

以てその如何に藝術を愛し、特に悲劇に就いて深き趣味と注意をせしとを窺知するに足らむ。

九一　婦女を御するは難し

ナポレオンは、平生疑心深かりしかば、己れに近侍する女性の、政治上に容喙して、之を左右するに至らんことを懼れ、專ら之を避けんと努めたり。

曾て自ら語りて曰く、女子はその惡しき時に於ては、男子よりも一層惡くして、從がつて一層罪惡を犯し易く、一旦墮落すれば、男子よりも一層墮落するものなり。

彼等は常に男子よりも善か、然らざれば惡かなりと。由りて行軍中に於ける一の出來事を物語りて曰く『予が一度兵を率ゐて、コルドクタンドの山地に入らんとするや、橋を架し、その上に二人の士官を置きて、婦人の之を通行するを禁止せしめ、自ら之が檢分に出で行きたたるに、橋

の彼岸には婦人の一隊群をなして留まりつゝあり。余を見るや否や、叫んで曰はく、一寸法師よ。我等の通行を止めたるは、汝なるかと、蓋しナポレオンは、當時軍隊中にて一寸法師と綽名せられければなり。既にして余の軍進行しけるに、婦人は何處よりとも知れず、はや來りて軍隊の中に交りつゝありしかば、余は、怒りて二人の士官を召喚し、その不都合を叱責したり。然るに二人は、決して女子の通行せざりしを確言しその自己の責にあらざる旨を爭ひしかば、余は更に女子の二三を召し來らしめて、之を詰問せしに、彼等は平然として、盡く糧食を入れたる樽の中に潛み來りたる由を白狀したりき』と此の如きを以て、ナポレオ

ンは、密かに婦人を御するの難きを思ひ、己れの妻をしてすら、之が政治上に關係するを許さゞりき。

九二　親ら畫策して親ら戰ふ

その軍に臨むや、總指揮官たると同時に、又參謀總長たり。即ち親ら畫策し、親ら戰ひたるものにして、コンパスを開きて、地圖の上に種々の色の旗の附きたる針を刺し、その旗色を以て敵味方、兵種、兵團等を區別し、一般の狀況を觀察しつゝ命令の基礎を作り、之に因りて參謀總長、ベルチエに、活動せしめたりといふ。

九三　天運定まる

曾て自殺を企だてし事を人に語りて曰く、余の露國に敗るゝや。コッサック兵の追擊甚だ急なり。余乃ち醫に命じて毒藥の囊を造らしめ、以て危急に備ふ。

爾來予常に之を頭に懸けて須臾も離さず。予の再擧して、本國に歸るや、一夜慨然以爲らく、予幸ひに百難を排して今日に至るといへども、既に復た未來千百の艱難に堪ふるの勇なし。

如かず潔よく自殺して佛國の命運を全うし、兼て子孫永遠の計を爲さむにはと。乃ち囊裡の毒藥を取つて水に和し、一氣に嚥下す。然れども日を經る久しき藥力既に減じて容易に死するを得ず。煩悶苦惱覺えず呻

吟の聲を發す。諸人乃ち馳せ來りて、百方救回に力め、以て我が命を全うす。

嗟呼、天運の定まる所。復た奈何ともするなし。セントヘレナは、實に天の命ずる所。予が終焉の地なりと。

九四　會見を拒絶す

ナポレオン、セントヘレナに在りし時のことなり。一八一六年六月十七日、即ちワーテルロー大戰の紀念日に於て、委員を載せたるニューカッスル號は、着港したり。露國委員バルメーン伯、墺國委員スツルメル男夫妻、並びに佛國委員モンチユニユー侯、副官ゴール大尉と共に上陸

せり。

ナポレオン之を聞て嘲り笑うて曰く、かゝる者を、遠く此の地に差遣すとは、又何たる馬鹿げたる事ぞと。

モンチユニユーは、即日ロングウッドに到り、次日歸港の途に就くべき好便に托して、ナポレオン存在の確報を本國に持ち歸らしめんことを、知事に謀りたりしが、事急にして之れを行ふに暇なく、越えて二日、即ち六月二十日に及びて、セントヘレナ知事ローは、先づベルトランに問ふに、ナポレオンが委員を引見すべきやを以てしたり。ベルトラン答へて曰く、之なし。彼等は唯一八一五年八月二日の條約により、ナポレオ

ンの在島をたしかむるの任を負ふて到れるのみと。

ベルトラン、即ちなほ其の所謂條約なるものゝ、抑も何物なるやを問ひたりしが、委員は其の寫しだに有せざりければ、如何にすべきやを知らざりしが、三週日の後、漸くにして鞄の中より該條約の全文を掲げたるジユールナル、デ、デバーの汚れたる一部を發見せしものありて、茲に稍々愁眉を開くことを得、即ち直ちに之をナポレオンにすゝめて、其の閲覧を請へり。然るにナポレオンは八月二十三日に於てモントロンに命じて、斷じて委員の面會を拒絶すべきの意を通ぜしめたり。

是に於て、モンチユニーは、使命を果すに所なきを怒り、兵を引て、ロ

ングウドに闖入し、腕力を以て其の意を貫かんとまで思ひ立ちしかど、遂に人々の制する所となりて、之を行ふこと能はざりき。

其の年の九月二十七日、委員等は、ロングウッドの門前まで至りたりしが、彼等の通券は、英國士官の行き得る所にのみ用ゐらるべくして、其のロングウッドには、効なきものたるを以て、守衛士官はその中に入るを拒みたり。

ナポレオンの、委員との會見を拒めるは、政治上の理由に基づくと云へり。曰く委員等は、余が彼等を引見せざるを以て、余の過誤なりと云ふと聞くも、これ決して然らず。余は寧ろ媚佞を惡む者なりと。彼は素よ

りルイ王の代表者たる、佛國委員をば、初めより接見するの意志なかりきと。

されど露國委員夫妻及び墺國委員に向つては、一個人の資格として面會するの苦しからざるを語り、曾て之を招待して會食せんとし、其の來會を待つこと久しかりしが、二人は都合上之に應じ難きを以し謝したり。是に於て委員のナポレオンを見しもの、モンチユニユーを除きては、一人も之なかりしなり。

而もモンチユニユーの會見と云ふものも、ナポレオンの生前に於けるにあらず。死後に於けるのみなりき。

九五　精力絶倫

一七九六年伊太利征討の時、僅かに一週間に五頭の馬を乗り斃せりといふ。又二日間も睡眠せざることある代りに、二日間も睡眠せしことあり。ワグラムの戰爭に必勝を察し、命令を發せし後、砲煙彈雨の中に二十時間の快眠せしことあり。

其の精力の絶倫實に驚くべく、其の些少の疾病の如きは、戰場に出づれば、直ちに平癒せりといふ。

九六　皇帝にして猶ほ此の如し

又其の戰記を見れば、夜の八時に宿營に就き、朝の八時に早く出發せしこと、屢々之ありしを見る。又夜中前哨線を見廻りしことあり。此等の事は到底、普通の將軍の爲し能はざる所にして、皇帝と稱する人にして、實に此の如し。其の勤勉と其の精力とは、驚ろくべきにあらずや。

九七　五晝夜眠らず

メッツの戰ひより巴里に歸れる時、秘書官がナポレオンの留守中に推積せる書類を、八人の人夫に負はしめて、ナポレオンの前に出せば、ナポレオンは、一々之を閲して五晝夜の間に一睡だにせず、之を終はり。後三十六時間續きて眠れりといふ。

九八　ナポレオンと宗教

ナポレオンは、十八世紀の思潮に乗じて、唯物的に傾き、殊に其の青年時代に於て、ルーソーの民約論を愛讀せしが爲め、感化を受けて、全然非基督的となり、基督敎の所謂神の信念を得ること能はず。

曾て伊太利遠征の時、世に有名なるマリア聖女の影像を鹵獲して、以て本國に送れる時、之に箋して曰く、是は木にて造られたるものなりと。

其の宗敎的信念のなかりしこと知るべし。

然れども宗敎に對しては、注意甚だ深く、其の皇帝の位ゐに陞るの前、埃及に遠征するや。艦中に、バイブル、コーランを始め、印度の古聖典を携へたりき。是に由りて之を觀れば、其の宗敎に對する注意は、周到

と謂はざるべからず、彼は總べて自已に接する人民の宗敎に就きては、相當に注意し、決して度外視せざりき。

埃及はマホメット敎の行はるゝ處にして、又印度の古聖典を携へしは、更に進みて、印度地方に攻め入らんとせるが爲めなり。

歐洲人は、基督敎以外の宗敎を、排斥するを普通とすれど、ナポレオンは、一概に之を排斥せざりしのみならず。把つて之を通讀したりしなり

是れ其の思想の他に異なりし所以にして、晩年セントヘレナ島に在りし時も、宗敎に就いて種々談論する所ありき。

九九　超越の思想

然れども此の時代の思潮と、一の異なる點あり。即ち十八世紀の淺薄なる思想より超越せし所ある是れなり。要するに宗教を輕んずれども、之を破壞するに非ず。之より超越したるものにして、宗教を政治上の方便に利用し、又宗教に對して注意しつゝありき。

勿論之を敬すれども、迷信若しくは、空想より脫出し、唯物論者なりと雖も、當時普通の唯物論者とは、其の趣を異にし、宇宙には、何等か人の尊敬せざるべからざる不可思議のもの、即ち人間の知る能はざるものが、存在せるを思へり。

一〇〇 遺言書

ナポレオンの、病ひ漸く革たまり、再び起つべからざるを知るや、遺書を認めて、死後の處置を指示する所あり。左に掲ぐるもの即ち是れなり。

一八二一年四月十五日、セントヘレナ島ロングウッドにて。

これ余が遺言狀、即ち余が最後の意志の發動なり。

一

一　余は五十年前、羅馬加特力教の下に生れたるが、今又其の下に於て死せんとす。

二　余の遺骸は、余の大いに愛したりし佛國民の中、セイヌの河のほと

りに置かれんことを望む。

三

余は常に眞に尊き妻マリー、ルイズを賞し來れり、余は最後の瞬間に至るまでも、彼女に向つて、最も温柔なる感情を持し來れり。余は彼女に、余が子の幼時を取り圍む敵より、彼を保護せんことを願ふ。

四

余の子に、彼が佛蘭西の公子として生れたるものなることを忘るゝなく、而して又歐洲人民を壓制する野心家の器具たるを願ふことなからんことを勸む。彼は何事も佛蘭西人民の爲めに、之を爲すべしといふ余が格言に從ひて、苟くも之を外にしては、佛國を損することもあるべからず。

五

余は英國の貴族政治及び其の御用殺人者の、暗殺する處となり、天年を了へずして、こゝに死す。英國民は余に復讐するに狐疑せざるなり。

六

我佛國は、尚ほ多くの計を有せしに拘らず。不幸にも再度の侵略を蒙るに至りしは、實にマルモン、オージロー、タレーラン及びフアユエットの離反、之をして然らしめたるなり。されど余は、彼等を許す。佛國の後世子孫も、亦余の如くに彼等の罪を赦せ。

七

余は賢き母のカルヂナル（カルヂナル、フエツシユノ謂なり）子の同胞ジョセフ、ルシ

アン、ジエローム、パウリヌ、カロリン、ジユリー、ホルタンス、カタリン、ユージエーヌに向つて、彼等の予に致せし厚誼を謝す。

予はルイが一八二〇年に於て、予を讒謗せる一書を公刊したる罪を赦す。此の書たるや全編實に僞證及び虛誕の事實を以て滿たせり。

予は六年公刊せられたる、セントヘレナ手書を初め、格言集文集など、題せる他の著書を非認す。此等の書は、予の一生を指導せる主義法則を無視したればなり。予はアンジアン公を捕へて公判に附したり。これアルトア伯が密かに謀りて、六十人の刺客を、巴里に放ちたるが故に、佛國民の安寧幸福及び名譽の爲めに、深く慮りたれば

なり。かくの如き時に於ては、予は常に又これと同樣なる行動を取るものなり。

二

一

余は余の子に、時計、函、勳章を初め、皿類、野營床、武具、鞍、柏車、余の禮拜堂の瓶、書類、生平余の身に纏はれし汗彩等を傳ふ

これ等は實に些々たる物品なれども、世界の喜んで語り傳ふる彼の父の歷史を回想せしむる所以のものとして、彼に向つて頗る貴重品たるべきなり。

二

余はレデー、ホランドには、法皇ピオ六世が、トレンチノにて、余

に與へたりし古寶石カメオを紀念として與ふ。

三　余はモントロン伯には、彼が六年の久しき、余に盡したる友情に對して、滿足を表せん爲め、又彼がセントヘレナにありしに依りて、被りたる損耗を償はん爲めに、二百萬フランを贈る。

四　余はベルトラン伯には、五十萬フランを贈る。

五　余の式部長官たるマルシャンには、四十萬フランを贈る。彼が余の爲に努力せしこと、恰も友人の如し。又彼が余の舊近衛兵或ひは士官の寡婦姉妹若くは娘を娶らんことを望む。

六　前同勦サン、デニには十萬フラン。

七　同ノヴアレーに十萬フラン。

八　同ピエロンに十萬フラン。

九　同アルシャムボーに五萬フラン。

一〇　同クールソーに二萬五千フラン。

一一　同シャンヅリエーに二萬五千フラン。

一二　同アツベー、キニヤリに十萬フラン。余は彼が己れの邸をポントヌエヴオ、デロスチノの附近に營まんことを望む。

一三　同ラカーズ伯に十萬フラン。

一四　同ラ、ヴカレット伯に十萬フラン。

一五 同軍醫總監ラレーに十萬フラン。彼は余が知れる人の中、最も有德なるものなり。

一六 同將軍ブレーエルに十萬フラン。

一七 同將軍ラフエーヴル、デヌーエットに十萬フラン。

一八 同將軍ドルーオーに十萬フラン。

一九 同將軍カムブロンヌに十萬フラン。

二〇 同將軍ムートン、デユヴエル子の遺子等に十萬フラン。

二一 同方直なるラベドアイエールの遺子等に十萬フラン。

二二 同リニにて死せしジロー將軍の遺子等に十萬フラン。

二三 同將軍シャルトローの遺子等に十萬フラン。

二四 善良なるトラヴオー將軍の遺子等に十萬フラン。

二五 同兄ラルマン將軍に十萬フラン。

二六 同レアル伯に十萬フラン。

二七 同コルシカのコスタ、ド、バステリカに十萬フラン。

二八 同將軍クローゼルに十萬フラン。

二九 同メンタヴアル男に十萬フラン。

三〇 同マリウスの著者アルノウルに十萬フラン。

三一 同マルボー大佐に十萬フラン。余は彼が筆を執りて、佛國陸軍の

光榮を辨護するの事を繼續し、誹謗者、違背者を窮殺せしめんことを望む。

三二 同ビニオン男に十萬フラン。余は彼に一七九二年より、一八一五年に至る佛國外交史を編せんことを勸む。

三三 同ポッキ、ヂ、タラヴォに十萬フラン。

三四 同軍醫エムメリーに十萬フラシ。

三五 以上の額は、余が一八一五年に於て、巴里を出發せんとせし折、置き來りし六百萬フランと、同七月以降の五分の利子との合計高によりて一計算せらるべし。すべての勘定はモントロン、ベルトラン兩伯及びマルシャン、其の任に當りて、銀行家と共に之を爲すべし。

三六 こゝに指定せる五百六十萬フランの全額を、差引きし殘額は、ワーテルローの負傷者及びエルバ島守備大隊の士官兵卒に謝意を表せん爲め分配せらるべし。

但し其の分配の方法は、モントロン、ベルトラン、ドルーオー、カムブロンス、及び軍醫ラレーの定むる所に任す。

三七 指定の人、逝去したる時は、こゝに定めたる遺贈物は、其の寡婦孤兒に引き渡さるべく、又寡婦孤兒もなき時は、其の儘返付せら

るべし。

三

(ナポレオンは、此の條に於て、自己所有の宮殿、衣服、武器、書籍及び其の他の物品の保管をそれ〳〵モントロン、ヘルトラン、サンデニ、マルシャン等の各人に托し、其の子の齢十六才に及びたる時を待ちて、盡く之を返付せんことを依頼し、又其の一家・兄弟にも、皆贈り物を送與すべきを記せり。ベルトラン、モントラン及び、マルシャンの三人は、遺言執行者として指名せられたり。

四月二十三日ナポレオンは、以上の遺言狀に付するに、更に他のものを以てせり。其の文に曰く。

一八一四年余の最愛最重の妻マリー、ルイズ皇后に、オルレアンにて渡せし黄金の正金中、彼女は二百萬フランを、更に余の爲に拂ひ出さゞるべからず。これ余が此の附錄の用に供するものなり。蓋しこれ余の愛するマリーの保護を請はん爲めに、余が最も忠誠なる侍臣に酬ゆべきものなればなり。

一

余は皇后にベルトラン伯が、パルマ公國内及びミランなるモン、ナポレオンに於て領有する土地より、收むべき歳入三萬フラン及び地